

太陽は未だ真上にあった

—ビルマ敗戦記—

松尾 剛 著



太陽は未だ真上にあつた／目次

はじめに	．．．．．	3
バシー海峡の海水浴	．．．．．	10
マンダレーへの道	．．．．．	26
ミートソンの戦闘	．．．．．	43
ミクテーラの苦闘	．．．．．	60
銃を杖に	．．．．．	75
脱出	．．．．．	94
一人ぼっち	．．．．．	113

はじめに

福岡の友人から一冊の冊子が送られてきました。

表紙には「太陽は未だ真上にあつた」の表題があり、「ビルマ敗戦記」の副題がつけられています。著者名を見ると、松尾剛まつおこわしとあります。

同封されていた手紙を見ますと、

「お手数をおかけしますが、私の国鉄時代の先輩《松尾剛》鳥栖とす機関区長の戦争体験の手記です。戦争の実態を後生に残したいと思い、お願いいたします。」

「お願いいたします」とあるのは、「たくさんの人の目に触れるようにし、戦争の実態を風化させないようにしてほしい」という思いのようです。

そこで、しばらく休んでいた私のブログ「徒然漫歩計」に連載しようということになりました。しかし、定年退職後、のんびりした生活を送るはずが、いつの間にか「二足のわらじ」どころか「三足、四足のわらじ」を履く身となり、思うように時間もとれず、初回のみ掲載で後が続かなくなってしまうました。

平成二十七年も残りわずかとなり、このままでは、福岡の親友や、松尾さんに申し訳が立たない。

そこで、今回、電子図書として一気に刊行し、「多くの読者の目に触れる」機会をつくり、福岡の友人や亡くなった松尾さん、松尾さんのご家族との約束を果たしたいと思ったしだいであります。

ところで福岡の友人というのは、JR博多車両区を、たしか七年前に退職し、今は悠々自適の生活を送る竹下博さんのことです。竹下さんの手紙を読むと、松尾さんというのは、彼が国鉄時代世話になった大先輩だと言います。

その松尾剛さんの思い出を、竹下氏自身が綴ったものがありますので、ここに紹介し、松尾さんの紹介に換えたいと思います



私は昭和四十五年四月一日に日本国有鉄道九州支社に入社しました。

六ヶ月間の研修を終えた後、十月一日付で鳥栖機関区車両係を拝命し機関士助手見習・

機関助手・電気機関士見習・電気機関士となり、ある日、電気機関士として乗務し門司機関区の常務後点呼に行ったところ、

「オイ若僧！ おまえは組合バッジを付けていないが何処の組合だ」

と問われ、私はまだ組合に組合に所属してなかったので、

「私はまだ組合に入っていないです」

と答えたところ、

「組合に入っていない者に、我々が勝ち取った乗泊に泊めることはできない」

と言われました。

仕事で来て寝るところがないというのはスジが通らないので、管理者である当直助役に交渉しようとしたところ、その助役はスーツと席をはずし私の要求を聞き入れてくれません。

困っていると、後ろからポンポンと肩を叩いてくれる人がいて

「泊まるところがないのなら、私共の確保した宿泊所に泊まりませんか？」

と声をかけてくださいました。

私は、その方の好意に甘え、その夜は紹介してくれた宿泊所に泊めてもらいました。

当時の国鉄はオープンシッパ制であり、組合に入ろうが入るまいが自由に選択ができる

制度でしたが、現実と理想ではこのように違っていました。後で分かったことですが、当時の組合は大きく分けて総評系（官公労主体）の組合、国鉄労働組合（国労）と動労（動力車労働組合）の二大勢力と、同盟系（民間の労働組合系）とに分かれていました。

私は翌日機関区に帰り指導室に行き、指導の方々に昨日のことを話したところ、指導の方から、

「竹下君、一応国鉄はオープンシヨップ制を取り入れているが、現実にはどこかの組合に入らないと仕事ができないよ」と言われ、イジワルをされた組合に入るよりは助けられた組合に入ろうと決め、その日から鉄道労働組合に所属しました。

その翌年の春闘のことだったと思いますが、機関区の便所で用を足していたところ、若い男性と女性が一人ずつ入ってきて便所の壁にビラを貼り出しました。そのビラの内容は「要求貫徹」とか「スト権奪還」とかいうビラを所構わずベタベタと貼り出しました。

私は、掃除のオバチャンが毎日きれいにしてくれる便所、おまけに花まで飾ってくれる便所に、そのような無法が許されてよいものではないと思います、その若い青年と女性に

「おい、やめろ！ 今貼ったビラをはがせ」と言いましたところ、二人は逃げてしまいました。

そこで私は、安部政敏という後輩と二人で、そのビラを剥がしてまわりました。

それから十分後、二、三十人のモサクレどもが徒党を組んで私を取り囲みました。彼らも上手いもので、手は出さず、腕組みをして足でボコボコと蹴るのです。

その時の管理者（助役）達は見て見ぬふり。何もしてくれません。その時です、二階の区長室から、私が初めて赴任した現場長（松尾剛）がタッタタッタと階段を駆け下りてきて、その二、三十人をかき分けて

「竹下！ 区長室へ上がれ！」と助けてくれました。

区長室に入ると、そこに動労の支部長 立石某なる者がいて、

「オイ若僧！」と声をかけてきましたが、私も腹が立っていましたので、

「若僧があるか！ 俺には竹下博という名前があるんじゃない」とやり返しました。

その後、区長室で動労の支部長と区長が話し合いを持ち、立石支部長から

「そんなに便所をキレイにしたいのなら今から便所掃除をしてこい」と言われ、私も

「よし分かった、今から便所掃除に行く」と言つて立ち上がるうところを、松尾区長から止められ、区長室を出るようにに言われ退室しました。

その後、この事件は門司鉄道管理局まで上がり、当時は組合が権力を持っていたため、



中央が松尾剛さん

松尾区長は五十四才の若さで退職、私は新幹線大阪運転所へ転勤が命じられ、この一件は終了しました。組合が権力を持っていたため区長は首を切られ、私は九州支社から大阪へ左遷されました。松尾区長は自分の首を差し出し私をかばってくれたのです。この区長は二回も戦争に行き、軍隊では「牛殺しの松」の異名を持つ勇氣ある区長でした。初任地で、このような勇氣のある区長に巡り会えたことは、私にとって記憶に残る感謝すべき巡り合わせでした。

竹下氏と松尾氏の出会いは、このようでした。

しかし「牛殺しの松」の異名を持つ松尾



さん、どんな強面こわもての人かと思いましたが、娘さんから送っていただいた写真を見ると、体格こそがしっかりしていますが、ちよつとはずかしがり屋さんに見える、やさしそうな男性でした。

娘さんの記憶によれば、松尾さんは、大正七年二月四日に生まれ、昭和九年に小倉中学校を卒業、その後、鉄道専門学校に進み、卒業後、国鉄に入社、昭和四十七（一九七二）年、五十四歳で退職したと言います。この間、二度の招集で戦地に赴きました。

では、未完の作品ではありませんが、松尾剛さんの道案内で、我々も時間を遡り、日本からビルマ（現ミャンマー）戦線へ向かう旅を開始したいと思います。

バシー海峡の海水浴

一

昭和十九年七月六日、東京・池袋の鉄道教習所専門部電気科二年生として寮生活しているとき召集令状がきた。あとでわかったことだが、ビルマ（ミヤンマー）の日本軍が、世界戦史にも例を見ない悲劇的退却戦を始めた四日後のことである。

編集部註Ⅱ昭和十七年八月、当初破竹の勢이었다日本軍は、一たんビルマ全域を占領したが、その後、英印軍や米中連合軍の、インド側からの侵攻に悩まされた。第十五軍指令官牟田口廉也中将は、英印軍の拠点、ビルマ国境に近いインドのインパール攻略を主張、大本営もこれを認め、三月に作戦は開始された。しかし当初から補給や制空権の確保は無視されており、弾薬と食糧の補給のない日本軍は苦戦に陥り、七月二日インパール作戦は中止された。

結局、この作戦で日本軍は参加兵士約九万名のうち約三万名が戦死、退却の途上飢えと病気で約四万二〇〇〇名の戦傷病死者を出した。

当時、専門部の「有隣寮」が改築のため、寮生は全部「有朋寮」に住んでいた。非常に南京虫が多い寮で、夜は睡眠どころでなく、皆困り果てていた。

その日も寝つかれない夜だった。寝台よりはましかもしれないと思い、長腰掛けの上に横になっていた。その時、電話の知らせを受け、寮長室に行ったが、遠くて全然聞きとれなかった。

電話交換に聞いてもらったところ、「召集令状がきているので、明後日十一時までに久留米の西部〇〇部隊に入隊せよ。召集令状は小倉駅で渡すので、列車の小倉駅通過時刻を知らせよ。電報も打っておいたが、電報では間に合わないと思い電話をしている」とのことだった。当時、特急列車はなく、一日数本の急行列車があったが、電話を受けてから最も早い急行に乗っても、決められた時刻に入隊することは不可能であった。飛行機についても問い合わせしてみたが、便があるはずもなかった。

やむなく同室の同僚の一人に、憲兵隊に行つて入隊遅延の理由について証明書を貰つて

くれるよう依頼する一方、同僚の加勢で小倉の自宅に送り返す荷物を梱包した。

翌七日、荷物の発送は同僚に頼み、教習所長や配属将校等に挨拶のあと、池袋駅から東京駅へ向かった。それぞれの駅で多数の同僚が見送ってくれた。証明書を依頼した同僚は憲兵隊で、証明書は東京駅長に貰うように言われ、東京駅長の証明書を駅まで届けてくれた。別の同僚は、東京から久留米まで二十四時間かかるため、食堂に無理をお願いし、当時常食にしていた豆粕入りの握り飯二個を用意してくれた。

列車は始発時からかなり混雑していたが、応召タスキをかけていたので座席に掛けられた。時間の経過につれて腹が減ったが、長い道中を考え、夜までは手をつけずに辛抱した。つとめて眠ることにしたが、目が醒めるといろいろなことを考えた。

現役の時、四度満州の冬を経験しているので、満州なら嫌だなど思った。また、昭和十七年五月、現役を満期除隊後は、父がしきりと結婚を薦めていた。父は専門部の受験にも反対だった。合格のあと父に話したが、これに対し何も言わなかったものの、召集されてみると、父の意向に添えなかった済まなさが、心をよぎった。しかし応召の身では妻子がないのに越したことはない、自分自身に言い聞かせたり複雑だった。

このほか現役時代のことなど思い浮かべているうちに列車は八日朝、小倉駅に到着した。

小倉駅では父と弟とが召集令状と弁当を持って乗り込んで来た。早速、弁当を思いきり食べようとしたが、腹は減っているのに半分も食べられなかった。母や兄弟のこと、商売や空襲のことなど車中での話は、ほとんど聞き役に回った。

父と弟とは久留米連隊の営門の前で別れた。所定の時間を過ぎていたので、ごく手短かく、「からだだけは気をつけろよ」、「お父さんもな」と言っただけで別れた。父は戦争体験があり、負傷もしていたので未練がましいことは嫌いであった。営内で担当の将校から入隊時間の遅れを一応やかましく叱責されたが、処罰はされなかった。

あまり覚えていないが久留米連隊には十日間ぐらい居たように思う。その間、各人に兵器や被服が支給され、私物の服や靴などは家に送り返した。

一一

ここで初めてビルマに行くことを知らされ、ビルマの本隊に合流するまでの部隊編成がなされた。私は小隊長を拝命し、約五〇人の初年兵を引率することになった。現役のとき

は兵卒であり、小隊指揮の経験は無かったが、鉄道教習所専門部では一年の時から小隊指揮者を命ぜられ、教練の時間には約五〇人の電気科生の指揮をとっていた。小隊長を拝命した時、特別に困ることはなかった。

出発は深夜だった。事前に厳しく注意されていたので極めて静粛に行われ、久留米駅まで行軍して客車に乗り込んだ。門司港駅には翌日の夕方着き、門司港で数人ずつ民家に寄宿した。私は夜間の巡察を命ぜられていた関係上、家族の方とゆっくり話をする時間もなく、ひと晩お世話になりながら、どの家のお世話になったのか記憶に残っていない。

翌朝、門司港の棧橋前広場に集合したわれわれビルマの第五十六連隊の補充要員は、小隊ごとに別々の船に乗船した。輸送途中で敵潜水船等に攻撃され、撃沈された場合を配慮した措置と思われた。

私が乗船した光栄丸は、排水量一万二〇〇〇トンの新造タンカーで、聞けば処女航海とのことだった。乗船したもののすぐには出航せず、出航は数日後であった。船団の船の数は分からなかったが、かなり大船団のようで、船団の周囲を駆逐艦か駆潜艇が護衛しているのが見えた。光栄丸にも機関砲一門が装備され、海軍軍人が数人乗り込んでいた。戦局の推移や輸送船の装備から考えて、この航海はかなり危険率が高いかもしれないと思われた。

編集部註Ⅱ前年の昭和十八年二月一日、ガダルカナル島から日本軍が撤退した。同島方面での巻き返しをはかる日本海軍は四月七日から「い号作戦」を展開した。ラバウルに赴き、自らこの作戦の指揮をとっていた山本五十六連合船隊司令長官は四月十八日朝、最前線部隊の状況視察のためラバウルからブーゲンビル島南方のバラレ蓄地向かったが、アメリカ軍に暗号を解読されており、ブーゲンビル島上空で撃墜され戦死した。

十九年七月七日にはサイパン島の日本軍守備隊残存兵力約三、〇〇〇名が玉砕した。前年末から二月にかけて中部太平洋の島々を陥落させたのち、六月十五日約七万一、〇〇〇名の兵力をサイパン島に上陸させた米軍に対し、約四万四、〇〇〇名の日本軍守備隊は懸命に応戦したが、十九、二十日のマリアナ沖海戦で連合艦隊が敗北したため、大本営は二十四日同島の放棄を決定した。次第に島の北端に追い詰められた日本軍は七月六日、戦闘を指揮していた斉藤義次陸軍中将与南雲忠一海軍中將らが自決、残りの守備隊も七日から八日にかけて万歳攻撃を敢行、玉砕した。その際、約一万人の一般住民もその多くが手榴弾や毒物で自決、あるいは断崖から身を投げ自ら命を断った。

しかし台湾の高雄までは別段異常はなかった。高雄に停泊している間、小隊長には上陸許可がおりたので、初年兵らが郷里に出す手紙と、あらかじめ注文を受けた待望の食料、バナナ、砂糖を買い求める資金を集めて上陸した。預かった手紙を投函し、高雄の街を見て回りながら蛇皮の財布を私個人用に購入し、バナナと砂糖を一籠ずつ光栄丸に積み込むようにした。所定の時間に帰船するとすでにバナナと砂糖は積み込まれていた。内地では甘味品に飢えていた時であり、全員大いに喜んだ。積み込んだ食料品も毎日平等に分配した。

高雄に何日か停泊した後、船団はマニラに向かった。乗船以来われわれの船室は船倉に造られていたが、タンカーを改造したもので、船室は暑くて換気もよくなかった。しかし日中は甲板上に出るのを禁止され、日が沈んでからしか許されなかった。

高雄出航後は特に船室の温度が高くなったような気がする。甲板が上がって満天の星を眺めながら、大きく深呼吸したときの壮快さは、表現の言葉もないほどいい気分だったが、機関砲の砲側に配備の水兵の数は増えてきたように思え、なんとも不気味だったのも確かである。

夜も次第に更けて、肌にあたる夜風が幾分涼しくなると、甲板上で皆、思い思いに横になった。すでに白河夜船をきめている者もいた。私も異常がないのを確かめて、今日も無

事に終わったと思ひながら横になった。遭難に備えて軍装を解くことは禁じられている。帯剣を締めたまま、銃は右手に抱いて横になるのが習慣だった。星の輝やきがことのほか鮮やかに思え、これが南の空かとロマンチックな気分で、うとうとと浅い眠りについた。

三二

甲板上が急に慌ただしくなったように感じて目が醒めた。時計を見なかったので、はっきりした時間はわからないが、後で考えると夜中の一時か二時ごろでなかったかと思う。上体を起こし、暗闇を透かすようにして甲板上を見回すと、機関砲の砲側で水兵が忙しそうに動き回っているようであった。危険が迫っているのを直感した。

その時であった。

「ズズーン」

という鈍い衝撃を感じた。続いてもう一回。魚雷を受けたのでないかと思った。半信半疑のなかで、船員か水兵かが、「やられたぞ！」と叫んでいるのを聞いた。やはり魚雷で



あったかと思った。なぜか海の中は寒かろうなどの思いが一瞬心をかすめた。怖さはなかった。

すでに甲板上は騒然、蜂の巣を突つついたようになっていた。極度の緊張感が胸をよぎった。とにかく小隊全員を落ち着かせなければと思った。「全員、甲板上に集合！」と大声で叫び、「各分隊人員点呼、異常の有無を報告せよ」と、これも大声で命じた。

海軍が気を狂わんばかりに機関砲を打ちまくっていた。敵潜水艦が浮上しているかと、その方向を見たが何も分からなかった。船からは盛ん

に爆雷を投下しているらしく、爆発音がひっきりなしに聞こえた。

ようやく各分隊長の人員の掌握が出来とみえ、「第一分隊、異常ありません」と報告を受けた。「第二分隊、気違いが出ました」の報告に続き、「第三分隊も気違いが出ました」と報告された。「しまった」と思った。極度の恐怖感から一時的に錯乱状態に陥ったのだろうが、どうしようにも処置をする暇はなかった。爆雷の投下は相変わらず続いているようだったが、光栄丸はすでに傾きかけていた。海に飛び込むわけにはいかなしいと思いつながら、大発艇が甲板に積んであるのが目についた。「よし、これだ」と決心し、全員を少しでも落ち着かせるため、「よーし、わかった」と言い、全員大発艇に乗るよう命じた。

全員が大発艇に乗ったのを確認して、「ロープの横におる者は、船が沈むときにロープを切るのを忘れるな、わかったか」と命じた。大発艇はロープで固定されている。切らなければ船もろとも沈んでしまうからだった。

「ハイ」という返事に交じって、「隊長殿、底に穴があいています」と叫ぶ声があった。「穴にはボロきれか何か詰めておけ」と指示し終わらぬうちに、「隊長殿、この大発艇にはガソリンがありません」と叫ぶ声が聞こえた。「よーし、わかった、ガソリンは無くてもいい。浮かぶだけでいいんだ」と大声で叫び、とにかく全員の動揺を抑えるのに懸命であった。

四



パシー海峡だけで、広島原爆を越える犠牲者が発生した。
出典 blogs.c.yimg.jp

船は相当に傾いてきたのに、海軍は相変わらず狂気のように機関砲を撃ちまくっていた。爆雷の爆発音も聞こえていた。われわれは救命胴衣をつけていたが、海軍は何もつけてい

なかった。「ロープを切るのを忘れるな」と指示しようとした瞬間、光栄丸の大きな煙突が横になって、頭上に迫ってきた。

船が沈んでいるな、大発艇は浮いたな、と直感したのに、次の瞬間は海の中であつた。渦に巻き込まれた兵隊の軍靴が次々と私の頭を蹴飛ばしていった。「痛いなあ」と感じたのが最後であつた。あとは意識がなかった。渦に巻かれて、どのくらいの深さまで沈んだのか、どのくらいの時間沈んでいたのか全然わからなかった。気がついた時は海の

上であつた。回りには何も見えなかつた。高い波に体を上から底へ運ばれるときに気分が悪くなるようであつた。救命胴衣のお陰で、あまり骨おらずに首から上を水の上に出すことができた。小銃はすでに持っていなかつたが、なるだけ軽くなるために、帯革をはずして帯剣を捨て、雑嚢や水筒も捨てた。時計を見た気がするが、はつきりとした記憶がない。二時か三時ごろとしか覚えていない。

それにしても周りにだれもいないのがどうしても腑におちなかつた。あれだけの人数がどこへ行つたのか？ みんな死んだのか？ それとも一部でも他の船に助けられたのか？ まったく見当がつかなかつた。自分一人が海に浮かんでいるのが不思議でならなかつた。また、自分の意識が戻つたのは、海に浮かんですぐであつたのかどうかもまったくわからなかつた。

波が高かつたので、ただ海に浮かんでいるだけでも疲れがひどかつた。ふと気がつくとき、小さな板切れがこちらに近づいてくるのが目についた。これ幸いと板切れにつかまつたので幾分楽になつた。しかし時間の経過とともに体が冷えてきて、寒くてたまらなくなつた。早く夜が明けないかなあと思ひ、待ち遠しかつた。夜が明けると寒さもいくらかやわらぐのではないかと思つたが、なかなか明けなかつた。

尿意を催してきたので小便をした。小便は衣類の内側を、腹から胸へと肌を温めながら顎の下から出ていった。冷えきった腹や胸を温めながら通っていくのは何ともいえぬ良い気持ちであった。

五

波に体は木の葉のように、上がったたり下がったりを繰り返しながら、頭の中は常に何とか助かる方法を見つけだそうと懸命であった。何度考えてもそんな方法があるとは思えなかった。夜が明ければ、近くを船が通るかもしれないと考えたり、あるいは相当時間を経過したので、陸地に近づいてはいないだろうかなど考え、夜の明けるのが待ち遠しかった。左手の方に兵隊が一人浮かんでいるのが目についた。突然現われたような気がした。前方からも一人近づいてきた。三人が一つ所に集められたようになったが、それぞれに高くなったり低くなったりして、言葉を交わすことはなかった。私も疲れがひどく、しゃべる元気がなかった。突然、左側の兵が大きな声で歌いはじめた。私も唱和した。大声を張り

あげると疲れがひどくなり、自殺行為のはずなのに衝動的だった。

海ゆかば、みずくかばね

山ゆかば、草むすかばね……

歌い終わった瞬間、一時的ではあったが晴ればれとした壮快な気分だった。自分たちのことを歌っているかのように錯覚したのかもしれない。どうせ助からぬ命ではないか、大君のため潔く死のうではないかと語りかけているようであった。

寒さと、大きな上下動がすぐに現実に戻してくれた。助かる見込みはほとんどないと思われながら、夜が明けれることに一縷の望みを託していた。

待望の朝がきた。波で体が持ち上げられるたびに、次第に視界が開けていくのが実感できた。いくらか元気になった思いがしたが、寒さだけはどうにもならなかった。体を持ち上げられるたびに周りを見回すが、空と海のほかは何も見えなかった。

“海ゆかば”をともに歌った兵たち二人は、いつの間にか見えなくなり、夜が明けるところには、また一人になっていたように思う。その後は二人と近くなるかと思えば、いなく

なったり、一人になったり、二人になったり、ときには三人になったりしたが、やはりほとんど一人だった。

夜が明けても寒さは相変わらずであった。寒くて、寒くてどうしようもなかった。逆に頭は陽に照らされて暑くなり、水をかけたり、水に潜ったりしなければならなかった。

何時ごろであったか、飛行機が頭の上に飛んでくるのが見えた。右手を高く挙げて何度も丸く振ったが、何の反応もなかった。しかし、あるいはと淡い希望を持つことにした。

だが、時間の経過とともに疲れがひどくなり、睡魔も加わって、ときどき意識が中断することが多くなった。眠ってはならぬと思いつつも、どうしようもなかった。

疲れがひどくなり、意識が中断した時も、板切れはしっかりと抱いていた。波で体が高く持ち上げられたときは、いつも周りを見回していたはずなのに、いつごろであったろうか、突然近くに、あまり大きくない船がいるのに気づいた。距離はよく分からなかった。五十メートルか百メートルか、もっとあったかもしれない。まったく夢のようだった。船は、軍艦のようであったが、動いているのか停まっているのか分からなかった。

水泳にはまったく自信はなかったが泳ぐしかなかった。抱いていた板切れを手放し、船に向かって夢中に泳いだ。救命胴衣のお陰もあって、どうにか船の下まで泳ぎ着いたが、

船に上がる方法がなかった。仕方がないので上の方を見上げていたら、波は船の甲板より高くなるのに気づき、そのまま持った。すぐに体が甲板より高く持ち上げられたので、甲板に飛びついたが、衣服が水をたっぷり含んでいて、しっかりつかんだはずの手が重量を支えきれずに、波に引き込まれるように下に落ちた。

上から何か叫んでいるようであったが、何と言っているのか分からなかった。すぐにロープを降ろしてくれた。つかまると甲板に引き上げてくれた。助かったと思った。助けてくれたのは水兵であった。やはり日本の軍艦であった。あとで分かったが駆潜艇であった。時刻は昼の二時か三時ごろでないかと思った。

マンダレーへの道

一

甲板上を水兵に案内されている時、小さな乾パンが落ちて見つけた。腹が減っていた。思わず拾いあげたが重油で薄黒く汚れており、口に出来なかつた。浅ましい感じ、恥ずかしい思いと一緒に、精神状態が正常化し、目が覚めたような感じであつた。

甲板上に造られた小部屋で、重油のしみこんだ衣類を水兵服に着替えると、あとは甲板上で適当に休むよういわれた。

服を着替える時気づいたが、衣類ばかりか全身が重油まみれであつた。それでも服を着替えると幾分さっぱりした気分になつた。甲板上に出ると、私と同じように救助されたと思われる者が二人いたが、疲れていたので声はかけず、少し離れた舷側に高く造られた監視用艦橋の鉄骨を背に、足を投げ出して休んだ。

しばらくして二人のうちの一人が「隊長殿」と、近づいてきた。よく見ると私が引率し

ていた小隊の兵隊であった。

「足を負傷しています。三角巾か何か巻きましよう」と、近くにいた水兵と何か話していた。初めて右足の向こう脛から大分出血しているのに気づいた。いつ負傷したのか、まったく思い出せなかった。

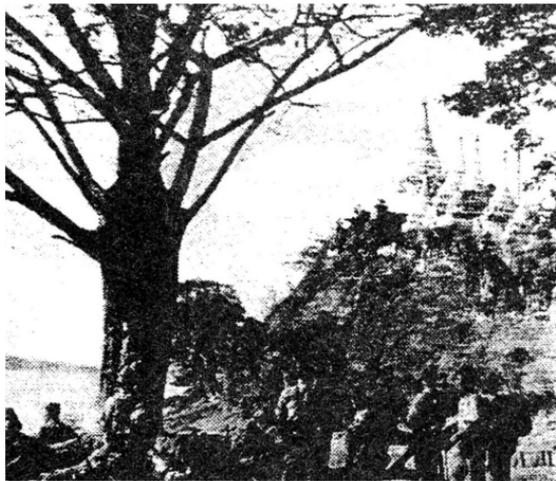
やがてごつきの兵隊が三角巾のような布で、丁寧に傷口を巻いてくれた。私は、「お互い無事でよかった、ありがとう」と礼を言ったが、それ以上話したくても話す元気がなかった。名前は黒木と言っていたように思うが、はつきりと思い出せなかった。そのうちに眠くなり、うとうとうとしていた。

うとうとうとしていたのは、ほんの僅かな時間であったと思う。上から人が降りてくる足音で目が覚めた。降りてきたのは海軍の将校であった。艦橋で敵潜水艦の搜索をしていることを後で知った。

将校は近づいてきて、「どうぞ、下に降りませんか」と言った。何のことかわからないので、「いいえ、結構です」と返事をしたが、「遠慮はいりません。下のほうがゆっくり休めますよ」と何度もすすめられた。あまりお断りするのにも悪いので、「それでは」と、将校の案内で船室に降りた。士官食堂のようであった。どうして自分だけが案内されたのか、さっぱり

わからなかった。

部屋には長方形の大きなテーブルがあり、周囲に何脚か椅子が並べられていた。すすめられるままに真ん中あたりの椅子に腰を掛けると、確かに甲板にいるよりは楽であった。しかし、なぜなのかと思う気持ちは消えなかった。将校は水兵に何ごとか指示すると、「どうぞ、ゆっくりして下さい」と言って部屋を出て行った。



マンダレーの木陰で休息する日本兵

部屋で一人になると、また疑問が頭の中をかすめた。なぜ自一分だけがこの部屋にいるのか不思議であった。いくら考えても理由はわからなかった。ひよつとしたら海軍さんは、何か勘違いをしているのではないかと考えると、急に少し不安になった。救助されてからのことを思い出してみると、一つ思い当たることがあった。私の足の傷を小隊の兵隊が治療してくれた時、確か「隊長殿」と呼んでいた。それを艦橋の上で潜水艦の搜索をしていた将校が耳にし、私を陸軍の将校と間違っ

たのではないか、というように考えると少し不安になった。

借りている海軍の服には階級章がついていなかった。将校と間違われても不思議はない。「年格好から考えても自分は二十六歳だからな」等と考えている時、水兵がみかんの缶詰を白い皿にあげて持つてきて、私に食べるように奨めた。

腹が減っていたし、喉が乾いていたので、みかんは最高のご馳走であった。遠慮なくご馳走になることにしたが、食べながらも先ほどからの不安が消えなかった。もし勘違いであるとしたら、早く打ち明けるべきではないだろうかと考える一方で、しかし勘違いであるかどうかは、はっきりわからないし、問い質す勇氣もなかった。露見した時は拙いことになるとは思いつながら、こちらで故意に騙そうとしたわけではないのだからと、自分自身に言い訳をして、成り行きに任せることにした。

いろんなことを考えながらも手と口は休みなく動かしており、一缶はあつたらうと思われた皿の中のみかんを全部平らげた。水兵がこんどは握り飯を二つ持つてきてくれたが、これもきれいに平らげた。

食後のお茶を飲みながら、このままここに居てもいいものか思案している時、先ほどの将校が降りてきた。

「ご馳走になりました」とお礼を申しあげたところ、将校は、「作戦中ですので、何もおもてなし出来ません」と言い、「それではこちらでお休みになって下さい」と、隣のドアを開けてくれた。

言われるままに部屋に入ると、中は個室になっていて、寝台が一つあった。将校が、「ここでお休み下さい」と、上の毛布をめくると、白い敷布が見えた。私は、「全身油で汚れていますので……」と一度は遠慮したが、「ここは私の部屋です。いくら汚れていても構いません、どうぞ」と奨められ、さぞ気持ちいいだろうな、との思いもあつて、寝台で休ませてもらうことにした。寝台に入ってから僅かな間、遭難前後のことを考えていたが、直ぐに眠ってしまった。

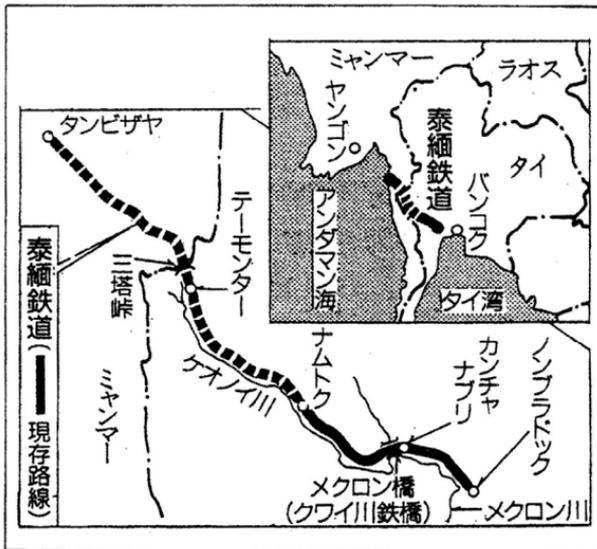
どのくらい眠ったかは分からなかったが、水兵に起こされた。水兵は「艦は輸送船に横付けしております。われわれは任務がありますので、輸送船に移乗して下さい」と言つて

甲板まで案内をしてくれた。輸送船から甲板まで綱梯子が降りていた。私は、「ありがとうございます。艦長さんによろしく」と丁寧に敬礼を申しあげ、綱梯子を昇って輸送船に乗り移った。

輸送船に移乗してからは何ごともなく、二三日でマニラに着き、全員上陸することになった。しかし、このころから下痢がひどくなり、足の傷もあって、マニラの第一陸軍病院に入院することになった。

遭難した時、海水と一緒に重油を大量に飲んでいるのは明らかである。下痢はそのためのものではないかと思つたが、診察の結果はアメーバ性下痢と診断された。

病院は米軍が使用していたのを接收したもので設備は良く、病室はコンクリート造りであつた。トイレも洋式で、一部屋に二人ずつ収容されていた。部屋の出入り口はドアがなく、開放されていたので通気が良く、暑気を凌ぎ易いように造られていた。入院して病室に案内された時、衛生兵から病衣を渡され、着替えるようにいわれた。その通りにして寝台に横になると、看護婦が台秤を押しきて、「体重を測定するので病衣を脱ぎ、秤に上がつて下さい」と言った。言われた通りに病衣を脱いだところ、下に何も着ていないのを見て、「病衣を着たままでどうぞ」と言い直した。



その通りにして体重を測定した後、看護婦から、「下着はどうしたんですか」と問われたのがきっかけで遭難の概略を話すと、「松尾さんは九州ではありませんか」と聞いてきた。「そうです、福岡県の小倉です」と答えると、「そうだろうと思いました。私は長崎です。同じ九州です」と自分の出身地を明かし「何もなくてはお困りでしょう。洗面具もで

すか」と、その時は台秤を押し詰め所の方へ帰ったが、夕方になって、「松尾さん、これを使って下さい」と、禪、洗面具等を持ってきてくれた。「金を全然持ってないんです」と言うと、「いいんです。看護婦みんなで積み立てた金で買ったのですから……」と言い「他に不自由なものがあつたら言つて下さい。出来るだけのことはします」と言つてくれた。異郷の地にあつて、同じ九州というだけで親切にもらった厚情が本当にありがたかった。

その後も入院している間、その看護婦には再

三世話になった。退院するときには、「ビルマまで行くのに、全くお金がないのでは不自由でしょう」と、軍医や衛生兵、看護婦仲間から浄財を集めて、持たせてくれた。感謝の言葉もないほどで、「ありがとうございます」と心からお礼を言って別れた。

入院したのが八月上旬で、病衣だけでも格別寒いことはなかったが、下痢をしていたので腹巻きが欲しかった。そこまで看護婦の厚意に甘えるわけにはいかなかった。ちょうど寝台の上の敷布が目についたので、悪いとは思いつながら背に腹はかえられず、無断で敷布を縦に二つに裂き、腹巻きを二枚作った。その後、何かの用件で来た衛生兵が、「敷布がないなあ」とつぶやいていたが、別に問い質されることもなく、すぐに一枚持って来てくれた。

下痢症状は入院した途端に軽くなり、十日もしないうちに、下痢は完全に治まった。しかし体内に菌がないことが確認出来るまでは退院は出来ないといわれ、体力の回復に努めていた。そのうちに、こんどは熱発した。診察してもらったところ、テング熱と診断された。熱は昼夜の別なく、ほとんど一週間続いた。その間、ほとんど食欲がなかったので、かえって体力は低下した。テング熱が治り、赤痢菌も検出されなくなって、体力が半ば回復してきたころ退院することが出来た。一カ月の入院生活だった。その間、軍医や衛生兵、看護婦から受けた厚情が身にしみた。

退院してからマニラの補充隊に收容された。補充隊では、病院を退院する等して、原隊復歸または任地に向かう兵たち四〇〇〜五〇〇人が輸送船の入港を待つていた。そのときのことだが、私と同姓同名で、階級までまったく同じ兵がいて、びっくりしたことがあった。

補充隊では全員が何らかの勤務についた。勤務内容は毎朝全員に伝達された。私は、防空壕掘りを二日間やったあと、マニラ市内の軍施設を警備する衛兵司令に三回ほどついた。施設の動哨と、施設の使用人として出入りする現地人の服装検査が衛兵司令の仕事であった。

ある日、補充隊の下士官から全員に、軍人勅諭の五箇条を書き、事務室まで持ってこいといわれ、小さな紙片を渡された。言われた通りに書いて事務室に届けておいたところ、夕方事務室に呼ばれ、明日から当分事務室で勤務するよう指示を受けた。事務室の仕事というのはガリ版切りで、いままでに比べると最も楽な仕事であった。ガリ版切りは乗船するまで続いた。

やがてマニラにシンガポール行き貨物船が入港し、ビルマ方面の各師団の將兵は全員

便乗することになった。前に乗っていて撃沈された光栄丸に比べると、小型で古い船であった。船の上は暑くて、いつも喉が乾いたが退屈な毎日であった。潜水艦を警戒して迂回しているとかで、シンガポールまで相当の日数がかかった。

シンガポールには一週間近く滞在したので、二回ほど外出し、一回は弟が戦死したブキ・テマ高地へ足を運んだ。街も見物したが特に印象に残るようなものはなかった。

シンガポールからバンコクまでは列車であった。客車で夜だけ二日間の旅であった。途中の小駅では子どもがバナナを籠に入れて、われわれに売りにきた。兵隊は持っている紙巻き煙草と交換した。朝がくると列車はジャングルの中につくられた側線に入って、夜がくるのを待った。のんびりした旅であった。

バンコクでも何日間か滞在したので、街に出る機会があった。その際、マニラで看護婦から貰っていた黒糸がなくなつたので、黒の糸巻きを一つ買って帰り、宿舎で使おうとしたら、糸は外側のひと巻きだけで、あとは木であった。騙された悔しさもあったが、あんなものを街中の歴とした店で売っていることに、さすがタイ国だと妙な感心をした。

同じ日に大きな通りを歩いていて、まだあまり古くなっていないペンチを拾った。さしあたって必要なものではないが、捨てるのももったいない気がして、とある店に入り、「買

わなにか」と言ったら、いい値で売れた。帰りに食堂のようなところで中華料理のようなものを食べたのを覚えている。

バンコクとも別れて、いよいよ目ざすビルマに入ることになった。途中のノンブラドックからモールメンまでは、いわゆる泰緬鉄道で、高い木橋のあることは聞いていたが、実際に通ってみて肝を冷やす思いであった。

編集部註 第二次大戦中、タイービルマ（現、ミャンマー）間に旧日本軍が建設した軍用鉄道が「泰緬鉄道」である。全長約四百十五km。一九四二年七月から翌四三年十月までわずか一年四カ月の突貫工事で完成させ、ビルマ戦線の日本軍に、兵隊や軍需品を運んだ。現在もタイ側山岳地帯入り口のナムトクまでの約百三十kmが利用されている。建設には主にイギリス、オランダの捕虜に従事させ、戦後、関係した軍人らが戦犯として裁かれ、百余人が有罪に、うち三十二人が死刑になった。

泰緬鉄道ではまた乗せられた車のほうが問題であった。客車ではなく貨車で、それも無蓋車に石炭を山なりに満載した上に乗っていくよう指示を受けた。落ちないように左右に

張られた二本の綱が、文字どおり頼みの綱で、しっかりと握っておかねばならなかった。綱を握りしめ、石炭の上に腹這いになって乗ろうとすると車両に一人しか乗れなかった。

四

列車の運行は夜間だけだったが、石炭の上では眠るわけにはいかなかった。最初の朝を迎えたときには、やれやれ思った。列車はジャングルの中の側線に引き込み、機関車は給炭水を始めた。給炭水に従事しているのは英軍の捕虜のようであった。何はともあれ眠るのが先決で、適当なところに横になり、ぐっすりと眠った。二日目の夜も同様で、三日目の朝にはモールメンに着いたようだった。

モールメンは、サルウイン河畔にあり、対岸のマルタバンへは夜を待つて船で渡ったが、いよいよ状況が逼迫してきたのを実感した。

マルタバンから先はまた客車だった。途中、爆撃で線路が破壊されていたので一区间ほど歩き、駅に待機していた列車に乗り換えペグーまで行ったが、マルタバンからペグーま

では何日間かかったか憶えていない。

ペグーでそれぞれ行き先師団別に分けられた。私は、T上等兵とH一等兵を引率してマンドレー行きの貨物列車に便乗し、マンドレーの第十八師団（菊師団）の連絡所に直行するよう命じられた。

便乗を許可された貨車には米袋が満載されていたが、天井までには相当空間があり、石炭の上に一人だけ這いつくばるのがやっとだった、ノンブラドックからモールメンまでの移動と違い、三人が乗るのに不自由はないように思われた。何よりも有蓋車であったので、扉を締めれば眠っても振り落とされるといふ心配はなかった。

しかし暑いので、夜、列車がペグーを発車しても当分扉を締められそうになかった。機関車は煙突から盛んに火の粉を吹き上げながら走った。ちょうど花火を見るようであった。これでは敵の飛行機のいい目標になるのではないかとの心配が一瞬心をよぎった。

暑いので扉を締められないまま、三人は、眠らないよう雑談した。H一等兵は、天草の出身とかで、天草の珍しい話を面白く、なぜか遠慮がちに話した。私より大分若い、田舎の純朴な青年に思えた。初年兵とのことであつた。

T上等兵はすでに戦闘経験があり、負傷して後方の病院送りになつていたが、傷もよく

なり、再び戦線に復帰する途中だと言っていた。

有蓋の貨車なので、左側の景色は見えなかったが、広大な平野を走っているようであった。稲を刈りとった後のような田んぼが果てしなく続き、ところどころ小さな部落や森があった。途中、駅に停車するたびに、どこからか籠に鶏かあひるを油で揚げたようなものを入れて二〜三人、ときにはそれ以上の子どもが集まってきて、何かしきりに言うのだが、言葉がわからなかった。籠の中の鶏のようなものは、旨そうな色をしていた。

T上等兵が、「あひるですよ。万年筆を欲しがっているのではないですか」と言っていた。金はなく、交換する物も持っていないことを手振りで伝えたが、子どもたちは列車が発車するまで去ろうとしなかった。

五

そのうち夜も更けて、暑さも幾分凌ぎ易くなったので、「寝よか」と、扉を締めるつもりで入口に立ち、前方を見ていた。機関車は相変わらず盛んに火の粉を吹き上げながら走っ

ていた。

そのとき、ブレーキがかかったような衝撃を感じた。駅かなと思つたが、その気配はなかった。列車は次第に減速して遂に停車した。と同時に、飛行機の爆音を聞いた。私は、「おい、飛行機だぞ」と叫んで貨車から、飛び降りた。

飛行機は銃撃してくるでなし、そのまま何もせず私の真上を、低空で左方向から右方向へ飛んで行つた。反転してくるまでに、出来るだけ遠くへ逃げなければと思ひながら、線路敷の横のどぶに足をとられ、反転して飛行機が銃撃を始めた時は、列車からそう遠く離れていなかった。「来た」と思ひ、とつさに畔の横に吸いつくようにして伏せ、銃撃のやむのを待つた。頭上を過ぎ、もう一度走り出している時、「兵長殿！ 松尾兵長殿！」と叫ぶ声があった。振り向くとH一等兵が走つてきていた。「おい、ここだ」と叫び、手をあげてその場に伏せて彼のほうを見ると、近づいてくる飛行機の灯りが見えた。「危ない！ 伏せろ！」と叫んだが、聞こえないのか銃撃の音で伏せたようであつた。上等兵はすぐ後ろにいた。

飛行機は執拗に何回も銃撃を繰り返していった。三人とも無事であつた。とりあえず列車に戻ると、機関車は数個所蒸気を吹きあげていた。機関士の姿は見えなかつた。自分たちの乗っていた車両に行つてみると、やはり被弾していたが、三人の装具には異常はない

ようであった。列車をあきらめて、三人は安全な場所を求め、近くの集落の横の竹林の中に寝て、朝のくるのを待つことにした。起きた時はすっかり明るくなっていた。飯ごうで朝の炊飯の準備をしていると、集落のビルマ人がもの珍しげに三々五々集まってきた。ほとんど子どもであったが大人もいた。

T上等兵が身ぶり手ぶりまじえ昨夜からの状況と、心配はいらないことを説明した。理解できたのか盛んにうなづいていた。私はT上等兵に、近くに駅はないか尋ねてもらった。その時、飛行機の爆音が聞こえた。「おい、飛行機だぞ」と言い、あわてて避難の支度をしようにとした。私たちのあわてぶりを見ていた住民は、「ニッポン、ニッポン」と言って笑った。住民は爆音だけで日本の飛行機であることを識別できるのかと思い、安心するとともに識別できなかった自分が恥ずかしくなった。

駅のある方向を聞き出したので、朝食をすませると歩くことにした。駅の名は確か「トウイ」ではなかったかと思うが、この駅では何も分からず、さらに隣の駅まで歩いた。「ニヤンレビン」という駅で、日本人の駅長がいた。事情を話し、マンダレー行き列車の運行を尋ねたが、駅長は「運行の予定はまったくわからない。マンダレー街道に出て、通行するトラックに便乗するほうが早い」と、街道までの道順を教えてくれた。駅の近くの露店で、



マンダレーに進軍する日本軍

うどんのようなものを売っていた。

マンダレー街道に出て、トラックの通るのを待ったが、便乗できそうなトラックはなかなか通らなかつた。仕方なく歩きながらトラックを停めようと歩いた。夕方になってやっと便乗することができたが、このトラックはピンマナまでしか行かなかつた。ピンマナでひと休みした後も同じようなことを繰り返しながら、むしろ歩くことのほうが多く、マンダレーに着くまでに数日かかった。

目的の菊師団の連絡所は、マンダレーの街の、大きな寺院の中にあつた。

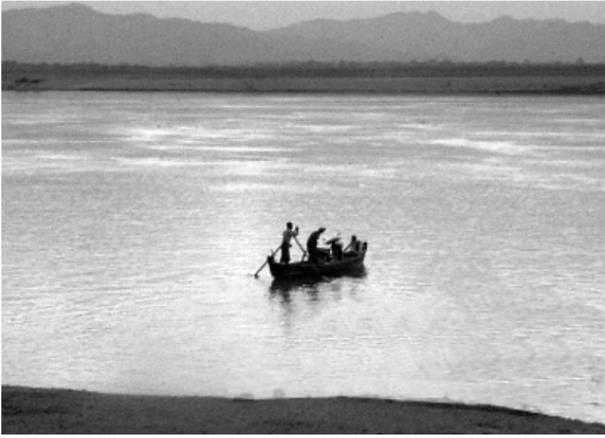
ミートソンの戦闘

一

マンダレーの菊師団の連絡所は、街ん中の大きな寺院内にあった。安全を考慮してのものと思われた。連絡所で簡単に私たちの目的や今日までの経過を説明したところ、戦闘指令所の便があるまで寺院の中で待機するように言われ、若干の糧秣を受領した。数日間は寺院の中でのんびりと過ごし、道中の疲れを休めることができた。

四〜五日後、戦闘指令所まで、事務用の消耗品を五梱包、裁量して行くよう命ぜられた。イラワジ河をタベキンまで遡れば、タベキンには連絡下士官がいるので、その指示を受けよ、戦闘指令所からタベキンまでは連日トラックがきているはずであるから、後はトラックで戦闘指令所まで行け、とのことであつた。行動はすべて夜だけに限られていた。舟は連絡所が準備した。

出発の夜、河岸に接岸した舟にはビルマ夫婦が船頭として乗っていた。女は妊娠して



エーヤワディ川 (旧イラワジ川)

た。男が船頭として竿を繰り、女は男の食事や洗濯の面倒を見ていた。男は舳先で河底に竿を差し、舟の上を歩いて進める方式で、流れに逆らって川岸の浅いところをゆったりした速度で進むようになっていた。

見ていると簡単に面白そうなので、途中で何度かやらせてもらったが、竿を引き抜くタイミングが悪く、そのつど河に落ち、船頭夫妻や、一緒の上等兵、H一等兵からよく笑われた。河には一メートルを優に超えると思われる大きな魚が、時折河面にはねていた。小銃で撃ったが手応えはなかった。舟は大きなイラワジ河の左岸を夜の間だけゆつくりした速度で遡り、夜が明けると河岸の葦のような草の中に隠し、日が暮れるまで安全な場所を見付けて待避していた。

一日目は、敵の飛行機が時折頭上を通過して行くことはあったが、銃撃を受けたことはなかった。二日目から飛行機の飛来する回数が次第に増え、そのつど近

くを銃撃している音が聞こえるようになった。戦線が近くなったのが感じられた。三日目には船頭夫婦が帰らせてくれと言いだした。

帰らせるわけにはいかないので、なだめるのに大変であった。金か相手の欲しがるような品物を持っておれば、なだめるに少しは楽であったが、三人とも何も持っていなかった。言葉がいくらか通じる上等兵が中心になって、われわれは懸命に説得するよりほかに道はなかった。一日に何度も頭上を低空で通過する飛行機を見たり、爆撃の音を聞いたりしては、船頭夫婦が帰らせてくれというのも無理からぬことだった。

夜になって飛行機の飛来する間隔が遠くなり、船頭夫婦の気持ちもいくらか落ち着いたのか、半ばあきらめてタベキンまでの同行をししぶ承知した。その後、飛行機の飛来する回数がまた増え、夜間も時折頭上を通過していったが、船頭夫婦は二度と帰るとはいわず、舟は無事タベキンに着いた。梱包を陸揚げし、船頭夫婦には丁重に礼を言い、帰ってもらった。タベキンには粗末な小屋が建っていて、連絡下士官が一人居た。下士官の言葉によれば、マンダレーで聞いた話と違い、戦闘指令所からはまったくトラックは来ないとのことであった。その上、毎日のように飛行機の銃撃を受けるので、昼はこの小屋にもおれない。また、周りの林の中には多数の時限爆弾？が投下されており、近寄るのは危険だと言っていた。

こんなわけで三人のうち一人は至急に戦闘指令所に連絡に行き、残る二人は梱包を持って安全な場所に待避し、トラックを待つよう指示を受けた。

戦闘指令所までのおよその距離を聞いたところ、今はモンミットに移されているので、歩いて二日行程だとのことであった。T上等兵もH一等兵も「自分が行きましよう」とは言わなかった。連絡には私が行くことにし、とりあえず待避する場所を探した。林の入り口に地隙があるのを見付け、連絡下士官に聞くと、大丈夫だとのこと、梱包を運び込んだ。

一一

昼間は危険があり、夜歩いたほうがよいと言われていたので、二人には、「トラックが迎えにくるまで待機しているように」指示して出発した。何時間か歩いているうちに夜が明けてきたが、先を急ぐ気持ちが強くなるまま歩いた。

時折、飛行機の爆音を聞くことはあったが、タベキンの近くのように、頭上を低空で通過するようなことは滅多になかった。一度山間から急に飛行機が現れ、頭上を低空で通

過したときは肝を冷やした。爆音が全然聞こえなかったので待避する暇もなかったが、幸い銃撃は受けなかった。

左手の彼方に牛のようなものを見かけ、急に牛乳が飲みたくなった。

疲れもひどくなり、水筒の水も残り少なくなっていた。

やがて日が暮れて、再び夜が訪れた。歩くのは夜のほうがいいと言われていたのを思い出し、そのまま歩き続けるつもりであったが、長くは続かなかった。前の晩に一睡もしていないこともあって、眠いのと疲れで、やはりひと休みしようと思った。

喉も乾き、水筒の水も無くなっていたので、民家でもあればと思いつながら歩いていたら、右手の山の斜面に民家を見付け、泊めてもらうことにした。なによりも水が欲しかった。家の入り口で身振り手振りでその旨を伝えたところ、痩せた小柄な男が出てきて、一、二度頷いた。意思が通じたと思い、家の中に入った。

中は薄暗かった。女と子どもが一人ずつ居た。そのとき気付いたのだが、中の様子がいまままで見てきたビルマ人の家の様子とは違っていた。「しまった！」と思ったが、引き返せなかった。水筒を出すと女が水を入れてくれた。小銃を入り口に置いたので、入り口に寝ようと思ったが、男が奥に行けと言う。仕方なく奥で寝ようとしたが男が寝せなかった。

何か見てくれと言っているようであった。見てみると、男は小さな弓のようなものを横に構え、壁にしつらえた的に向かつて矢を放った。ビシッと音を立てて矢は見事に命中した。同じようなことを三度繰返し、私に何か言いながら寝てもいいという仕種をした。気味が悪くなつて男の顔を見ていたが、怒っているのか笑っているのか分からなかった。私に対する示威ではないかと思うと多少不安があつたが、眠くてたまらず、そのままぐっすり寝込んだ。

翌朝、目が覚めたときは、家の中の者は皆すでに起きていた。厚く礼を述べ、何度も頭を下げ外に出た。内心ホツとした気持ちであつた。

朝までぐっすり眠ることができ、気分は爽快であつた。道を歩いても朝の涼気が気持ちよかつた。今日中には着くはずだと思い、爆音を聞くたびに避難するなど飛行機を警戒しながら道を急いだ。途中で会つた日本兵に道を聞くなどして、夕方には戦闘指令所に着いた。

指令所の下士官に官姓名を名乗り、要旨を簡単に告げた。下士官はしばらく名簿を調べてから、「お前は海水浴をしてきたろう」と切りだした。さも遊んできたかのように、詰問されたと思ひ、「海水浴なんかしてきませんよ」と不快そうに返答したところ、下士官は、

「おかしいな」と首をかしげながら、またしばらくして「台湾の南でたしか海水浴をしたはずだよ」と言った。やっと遭難のことだと分かった。

「ああ、あれですか。確かに台湾の南、バシー海峡で潜水艦にやられて、十二時間ほど泳いでいました。駆潜艇に助けられてマニラの陸軍病院に入院していたので遅くなりました」と説明した。

「お前、生きていたのか」と驚きながら下士官は、「よし、わかった。トラックを出してやるので五十六(連隊)に真つすぐ行け。五十六から連絡あるまでここで待機だ」と言った。タバキンの状況が気がかかりであったので、「タバキンには二人の兵が梱包を護送して、私が迎えにくるのを待つております。迎えに行きたいのでトラックを出して下さい」と頼んだが、下士官は「タバキンにはすぐトラックを出すので、心配しなくてよい。お前は五十六に直行せよ」と重ねて言った。仕方がなく戦闘指令所で待機することになった。

翌日、戦闘指令所に五十六連隊の連絡下士官がきたので、随行して連隊本部に行ったが、戦闘指令所を発つまで二人が到着した様子はなかった。それから間もなく、おそらく数日後と思われるが、タベキンが敵の手に陥ちたと耳にした。T上等兵やH一等兵の消息は確かめようがなかった。

連隊本部は転進して間もなくであったと見え、本部に着いた翌日、早速防空壕を掘ることを命ぜられた。私は、五、六人は入られる大きな壕を日が暮れるまでに掘上げた。壕を掘っている間も敵の飛行機が何度も飛来して上空を旋回するので、そのつど作業を中断して待避しなければならなかった。輸送機が敵の陣地と思われる方に食料や弾薬を投下しているのが見えた。飛行機は夜も飛来して、照明弾をしきりに投下していた。

私の掘上げた壕を見て、本部の下士官は、「お前、一日でこれだけ掘ったのか、気合い入っているなあ」と驚いていた。「明日も頼む」と私の肩をたたいた。

連隊本部には数日間いた。その間本部の下士官や兵とも親しくなったお陰で後日、負傷したとき助けられることになるが、このくだりはあとで説明する。

数日後、第三中隊に配属が決まり迎えの兵隊がくるまで支度をして、待機しているように指示された。夕方になって上等兵が二人、第三中隊から迎えにきてくれた。中隊に行く

途中、小さな部落を通っている時、飛行機が飛来し、繰返し激しい銃撃を受けたが、別に被害はなかった。

第三中隊の本部に着き、人事係のN軍曹に官姓名を名乗り、到着の遅れた理由について説明すると、N軍曹から、「第三小隊の配属とする。ただし、中隊長がいま居ないので、夜にもう一度こい。それまで第三小隊で待機せよ」と言われた。

第三小隊で待機し、夜になったので今一度本部のN軍曹のところへ行くと、N軍曹はM上等兵とともに、兵員の増減を計算し、現在員数と照合している真つ最中であつた。

私が行くとN軍曹は、「ちよつと待て。すぐ終わるから」と言つたが、簡単には終わらなかつた。M上等兵に、「おかしいなあ、合わんなあ、もう一度やってみよう。オレが読むからお前は記録してくれ」と言い、一桁か二桁の数字を読み上げはじめた。

私は横に立っていて何気なく、軍曹が読み上げる数字を暗算した。軍曹が上等兵に読み上げるのを止めて、「よし、そこまででなんぼになるか」と聞いた。上等兵が計算を始めた時、私が暗算で、「△△△ではないですか」と言うと、軍曹は、「それなら合うだけだなあ」と、私の顔を見ながら、「お前、何で計算したのか」と訊ねた。

「暗算です」と答えた。「ほうお、暗算か」と軍曹が感心したようにつぶやくのと同

時に、上等兵が、「△△△になりまして」と答えた。軍曹は、「それならいい。やっと合ったなあ」と、私の言った数値と上等兵の計算が一致したので、表情をなごませた。

表情をなごませながら、私に、「お前、暗算がうまいなあ、あつたま（頭）いいなあ」とからかうでもなく言つて、「よし、第三小隊配属は取り消しだ、指揮班に入れ」と前言を撤回、指揮班のほかに兵器係の助手を命ぜられ、人事係の加勢もするように言われた。

特別褒められるほど難しい暗算でもなかった。みんな暑いところに何年もいると、頭の回転が鈍るのかなと思つたが、後日この暗算が私の生死を分けることになるうとは、夢にも思わなかつた。

モンミットには一カ月半ほどいた。久しぶりに何回か風呂にも入つた。露天にドラム罐の風呂で、夜飛行機のこないときに手際よく交替で入つていた。乾季であつたので南天の星空が美しく、ドラム罐につきりながら南十字星を眺める気分は格別であつた。しかし、このドラム罐風呂は、横に渡した丸太で支えられているため、丸太材が焼ききれると、入っている人間もろとも横転する。私も一度入つておるとき横転したことがあつた。平和な思ひ出であつた。

一度下痢をしたときには、竹を焼いて炭をつくり、その炭を多めに飲んだら一回で治つ

た。だれに教えてもらったのか思い出せなかったが、不思議なほどよく効いた。その後も何回か下痢をするたびに竹の炭をつくった。

ある日、軽機関銃の調子が悪いということで、兵器班で修理をしてくるよう命令された。兵器班は戦闘指令所のはるか後方にあり、相当な距離なので馬で行くように言われた。現役兵当時は機関銃中隊であったので、馬の扱いには慣れていた。

翌日、馬を借りて朝早く出発した。兵器班で修理を終わり、試射は帰途行うことにして馬を急がせていたところ、爆音に気がつくのが遅れ、待避するいとまもなく飛行機が頭上を通過して行ったが、銃撃は受けずホッとした。帰途、大きな河の岸に軽機関銃を据え試射してみた。異常はなかったため、そのまま中隊に戻った。

四

次の作戦に備えて本部から小銃弾や信号弾を受領してくるようになった。信号弾は私が持つことにし、小銃弾は銃を持つ者全員に持たせたが、年配の召集兵は、「あまり年寄り

に持たせるな」と多く持つことを嫌がった。私自身、持てる数には限度があり、なんとか説得して持つてもらったが、気の毒でもあり、嫌な役目だなと思った。

食料は現地調達が原則で、自給自足であった。焼き米をつくって各自の携帯口糧とした。

ある日、中隊長から呼ばれ、「松尾は鉄道員であったな。ラングーンでは鉄道員が足りなくなったので、各地から鉄道員を集めている。お前行くか」と切り出された。さらに付け加えて、「どうでもいいんだよ」と言われたので、とっさにベグーからの車中で飛行機



にやられたことを思い出し、機関士の経験もないのにラングーンに行っても役に立つまいと考えた。そして、それ以上に皆から第一線から逃げたかと思われるのが恥ずかしく、「ラングーンには行きたくありません」と、きっぱり断った。「そうか、よし分かった」と、中隊長はそれ以上は何も言わなかった。

モンミットでも一カ月半ほど休養し、そののち作戦のため夜中に出発した。昭和二十年二月上旬であったと思う。いわゆるミートソンの戦闘であった。後日、文献で知ることができたが、この戦闘はイラワジ河の支流で、日本名天竜河と呼んでいた大きな河を、渡河してくる敵に反撃を加えようとするものであった。

編集部註 太平洋戦争四年目に入った昭和二十年二月といえば、米大統領フランクリン・ルーズベルト、ソ連首相スターリン、英首相チャーチルの三首脳が、ソ連クリミア半島南端の保養地ヤルタ近郊の宮殿で会談した時期である。会談は四日から十一日まで行われ、秘密協定が結ばれた。

ドイツ降伏後二〜三カ月以内にソ連が対日参戦すること、その代償としてソ連に対し、満州における優先的利益と、南サハリンの返還、千島列島引き渡しを三国で密約した。この秘密協定によって連合国の対日包囲網は完成、日本の孤立は決定的となった。

また、二月十六日には空母十隻を伴う計三十七隻の米機動部隊が硫黄島沖に姿を現し、大規模な砲撃と爆撃を始めた。迎え撃つ日本の守備隊は二万二千人。全長一八km、深さ二

〇〇三〇mの地下陣地にこもって耐え忍ぶ戦法をとったが、米軍は二月十九日南海岸から上陸、摺鉢山の攻防では山が変形するほどの砲弾をあびせた。三月十七日、司令官粟林忠道中将は大本営に、『戦局ついに最後の関頭に直面せり、全員壮烈なる総攻撃を敢行す』と袂別の電報を打ち、最後の突撃を敢行、補慮になった二百十人を除き全員が玉碎した。

五

ミートソンの戦鬪に際し、中隊長は攻撃開始地点と思われる所に着くと、月明かりの中で全員に次のように訓辞をした。

「中隊は黎明を期して対岸の敵砲兵陣地に切り込み攻撃をかける。行きは工兵隊の舟艇で渡河するが、帰りは泳いで渡ってくることになる」

ここまでひと息に言ってから、「この中に泳げない者はいないか、おったら手をあげろ」とつけ加えた。

私は大きな河を泳いで渡る自信はなかったが、だれも手をあげる者がいなかったので、

恥ずかしくて手をあげなかった。どうせ対岸に切り込み攻撃を掛ける以上、再び河岸まで帰り着くのは無理ではないか、泳ぐことができてもできなくても結果は同じことではないかと思った。中隊の中には泳げない者も何人かいたはずだが、この者たちも同じ思いであったと思われる。

しかし、この切り込み攻撃は中止になり、すでに河のこちら側に渡河してきて敷陣している敵に、正面攻撃を掛けることに変更された。攻撃地点まで行くと背囊をおろし、一つ個所に集め、軽装になって小休止の後、黎明を待つて中隊は散開し、攻撃を開始した。

敵は林の中に敷陣しているらしく、林の中から盛んに機関銃の発射音が聞こえていた。中隊が散開した所から林までは三百メートルくらいで、途中にあまり遮蔽物はなかった。確か第二小隊が左、第三小隊が右で、第一小隊が予備ではなかったかと思う。すぐに攻撃前進を開始し、中隊が林の縁に辿り着くのにそう時間はかからなかった。

第二小隊の攻撃は順調のようであったが、第三小隊の攻撃はある地点までくると停滞していた。中隊長が私を呼び、「第三小隊は速やかに前進するよう小隊長に伝えてこい」と命じた。私は遮蔽物を選びながら走って第三小隊長の所に行き、中隊長命令を伝えた。

小隊長は承知した。その旨、中隊長に復唱し、所定の位置に戻った時、第三小隊のK上

等兵がきて、「松尾兵長、手榴弾はないか。なければ集めてほしい」と言った。多くを持つていなかったので、戦死者の手榴弾を集めて、四、五発K上等兵に渡した。

そのときK上等兵が、第三小隊は攻撃正面にトーチカ（小型の要塞）のようなものがあり、前進を阻まれている、というようなことを言っていた。K上等兵は手榴弾を投擲中に戦死したことを後日知った。

夕方近くになっても第三小隊正面は膠着状態のままだった。中隊長は再び私を呼び、第三小隊長を呼んでくるよう命令した。第三小隊長の所に走り、中隊長の命令を伝え、一緒にきて下さい、と走りかけたら、小隊長から、「危ないから匍匐して行け」と言われた。「大丈夫です。隊長殿が待っています。急いで下さい」と言って走った。

夕方、中隊長から、「第二小隊は、日が暮れたら戦線を縮小して、中隊長の指揮下に入るよう小隊長に伝えてこい」と命令された。第二小隊長の所に行ったら、すでに第二小隊は河岸まで制圧して、小隊長は敵の方を向いて河岸に腰を掛け、うまそうに煙草をくゆらしていた。

私が中隊長命令を伝えると、「よし、わかった」と言い、煙草を差し出してくれた。一本頂戴し、私も岸に腰をおろして煙草を吸ったが、早く帰らなければと急ぐ気持ちが強く、

せつかくの煙草もじつくり味わうことができなかつた。

礼を言つて早々に第二小隊長と別れ、帰る途中、道を間違えたらしく、敵の機関銃と遭遇した。銃側の兵は、うつ伏せになっていたが、すでに死んでいるように見えた。近づいて裏返しにすると、やはり息が絶えていた。機関銃を貰つていこうと思ひ、両手に小銃と機関銃を持ち走りかけたら、急に銃撃を受けた。

その場に伏せて銃撃のやむのを待つて走りかけると、また銃撃をうけた。日本軍か英軍かどちらから撃たれているのか分からなかつた。まだ戦闘経験が浅く、銃撃音だけでは彼私の判断ができなかつた。

道を間違つたのかと思つたが、あるいは機関銃の銃身が光るのかなとも思ひ、機関銃を前後に少し動かしてみると、また銃撃を受けた。こんどは機関銃をそのままにして、自分の体を二、三メートルずらせたところ、銃撃は受けなかつた。仕方なく機関銃は諦めて帰ることにした。

ミクテラの苦闘

一

戦線は依然膠着状態のままであった。負傷した兵が不安そうに声をかけてくるが、心配いらないよ、とぐらいしか返事のしようがなかった。

彼我の銃声は、昼間ほどではなく、夜が更けるに従い沈黙の時間が長くなっていった。喉が乾いていたが、すでに水筒は空になっていた。水がないとなると余計に喉が乾くが耐えるしかなかった。

時折り敵の観測機が上空を何回も旋回しているのを見ていると、小銃でも撃墜できるのではないかと思われるが、“撃つな”と命令されていた。

状況は全然分からなかったが、どうやら退路を遮断されているようであった。完全に包囲されているらしく、斥候を出して退路を捜しているように思えた。

彼我の距離があまりないので、敵の話し声さえ聞こえるようであった。時どき喚声をあ

げ、さも突撃でもしてくるのかと一瞬緊張するが、突っ込んでくることはなかった。心理作戦であった。

夜半を過ぎたころ、隣の壕からごく小さな声で伝言があった。

「中隊は明朝、黎明を期して転進をする。ただし一切声を出してせならない。転進の時機は手で隣に合図を送り、次々に合図を送れ。出発に当たっては音をさせてはならない」
こんな内容であった。

これでは眠るわけにいかないと心に決めて、朝を待った。上空には時折り、敵の観測機が旋回を繰り返し、脅しの喚声をあげていた。

朝が近くなつて転進の合図がきた。隣に合図を送り、隣の兵の後に従つて無言で歩いた。河のほうに歩いているようであった。来た方向と反対だなと思つた。

間もなく河原になつた。茅のような草が身の丈ほどもあり、好都合のように思えたが、喜ぶのは早かつた。敵が転進に気づいたらしく、迫撃砲と機関銃の発射音が聞こえてきた。左足のすぐ近くに迫撃砲弾が落下したが、不発であつた。命拾いをした。

転進をさとられるまでは静かに、ゆっくり歩いてきたが、さとられた以上、脱出を急がなければならなかつた。小走りに歩度を早めていた時、河原に水を満水した直径三メートル

ルほどの、大きな水がめを見つけた。みんな、中隊長の制止も聞かず、顔と水筒とを水がめに突っ込み、水を飲むとともに、水筒に水を補給した。私も同様のことをしたが、不思議と負傷した者はいなかったようであった。

やがて最初の攻撃開始地点に到着した。だいぶ迂回したなど思った。その日は夕方まで大休止のあと、再度攻撃のため出発した。

こんどの攻撃地点では中隊長から道路遮断斥候を命ぜられ、戦闘小隊から選出された小銃手三名が私と行動を共にすることになった。中隊長は、私たち四人を集めると、

「ただいまから場所を指示するのでそこに壕を掘り、道路を通る自動車を攻撃せよ。自動車は一台も通してはならない。後方約五十メートルに重機関銃を一基待機させる。連絡用に紐を準備するので、機関銃に射撃を要請するときは、頭を下げて紐を引っ張れ。では、ただいまからその場所まで行くが、敵前であるから隠密にして絶対に音を出してはならない」

と使命を言い渡し、四人を従えて林の中をゆっくり静かに歩きだした。

しばらく歩いたら、河の岸に沿って走る幅六〜七メートルの道路に出た。中隊長は道路の直ぐ手前を指差し、壕を掘るように指示して、林の中を引き返した。私たちは無言で音

を立てないように壕を掘り始めた。土がそれほど固くなかったので、夜明け前には壕は完成し、偽装も完全に終わっていた。四人で方向を分担して監視することにした。

一一

ちようど夜が明け染めて、朝の最も気持ちのいいとき、道路の右手のほうから敵兵が一人銃を肩に引っ掛け、周囲を警戒する様子もなく、のんびりと歩いてきた。道路は、その先が迂回しているので、敵兵は突然現われたように見えた。敵兵は私たちに気づいていないらしく、まったく無警戒であったので、出来るだけ近づけて撃つことにした。何か食べるものを持っているかもしれないし、後で取りに行くにも近いほうが危険が少ないと判断したからであった。

敵兵がおよそ手榴弾の投てき距離に入ったと思われたとき四人が同時に引き金を引いた。敵兵はその場に倒れたが、銃声で戦友が倒れたのに気がついた敵兵がまた一人現われた。

二人目の敵兵は十分に警戒し、河岸のほうを中腰で見回しながら、一步步踏みしめるように近づいてきた。しかし、どうしても前の倒れた戦友のところまでは来なかった。仕方なく合図して四人で同時に撃った。これも簡単に倒れた。

その後はいくら待っても敵兵は道路に現われなかった。しかし、道路の向こうは河原で、道路との段差が一メートルぐらいある。段差を利用して接近し、手榴弾を投げこまれたらおしまいだと思い、河原に対する警戒は特に厳重にした。

だが、その後は道路の確保を諦めたのか、または作戦の変更からか道路に敵兵は現われず、やがて迫撃砲の連続射撃を仕掛けてきた。迫撃砲の場合、その発射音を聞いて頭を下げ、炸裂音を聞いて頭を上げるつもりが、絶え間なく撃ってくるので、頭を上げることができなかった。

それでも道路の警戒は片時も疎かにできなかった。もし道路警備の敵が、道路と河原の段差を利用して接近してくれば、道路の反対側、壕のすぐ横に顔を出すまでわからないからであった。顔を出したり引つ込めたりして警戒を怠らなかった。

時どき砲撃は小休止することがあった。改めて周囲を入念に警戒をしたが、異常はなかった。しかし後ろの林は木の枝が折れたり、草がなぎ倒されて、大分様相が変わっていた。

夜になってようやく砲撃がやんで静かになった。四人は交代で壕から出て、辛抱していた大小便を済ませた。一段落したところでS上等兵に状況報告に行ってもらうことにした。状況報告から帰ったS上等兵は、片手に敵の輸送機から投下された携帯口糧を、もう片手には水をたくわえた九二式水囊を持って、「昨夜、食糧の投下地点に夜襲をかけたらしい。これは中隊長から貰ったものです」と手短かに報告しながら、中隊長からの言葉を伝えた。「機関銃が連絡の不時で引きあげてきたというのに、小銃手だけでよく頑張った。あとしばらくだから頼む」と。

そして不安そうに「もう機関銃はいないそうです」とつけ加えた。

皆も一瞬、不安そうな顔をしたが、どうしようもなかった。こんなことは聞かないほうがよかったと思いいながら、「仕方がない、とにかく頑張ろう」ということで、機関銃については忘れるようにした。

それよりも中隊長から貰った敵の携帯口糧がありがたかった。朝から何も食べていないので腹が減っていた。昼間の激しかった砲撃がやんで静かになり、少し落ち着いてくると急に空腹を感じ、四人で分けて食べたが、実にうまかった。声を出すわけにいかないので、周囲を警戒しながら、口だけモグモグ動かして食べたが、皆満足げであった。

焼き米しか携帯できない我々にとっては、浅ましいけれども、敵の口糧にありつくのは一種の楽しみにさえなっていた。

貰ってきた水も分けて飲み、一段落するとぼつぼつ眠くなってきた。昨夜は一睡もしていなかったので無理はなかった。二人ずつ交代で眠った。砲声がやんだ静かな南方の空特有の、美しい星の輝やきが印象的であった。

夜の間、なにごともなく、二日目の朝を迎えた。今日も始まるかなと思つた矢先、昨日に続き迫撃砲の連続射撃を受けた。こちらも目標になっているらしく、林の中でしきりに炸裂音がした。壕のすぐ近くでも迫撃砲弾が炸裂するようになった。河岸の方を警戒しながら頭を下げ、壕が直撃されないことを祈るほかなかつた。

砲撃は夕方まで続いた。砲撃がやみ、夜になって回りが暗くなったころ、中隊から伝令が引きあげ命令を持ってきた。中隊に合流し、小休止のあと転進することになった。朝まで行軍をし、睡眠のため大休止になつても、私には員数調査や兵器の状況調査、弾薬の受領や分配等の仕事があつた。

それで昼ごろまで走り回っていた時、熱発の徴候を感じた。指揮班長に届けて横になったが、熱発は間違いなかった。マラリアだった。三日熱で、熱発は一日置きであったが、高熱であった。最も高くなつたときは四〇度を超え、出發命令が出た夕方は最も高いときだった。高熱は夜の十一時ごろまで続くと聞かされたが、歩かないわけにいかなかった。

真つすぐ歩けないので中隊の先頭を歩いた。右に寄れば後ろの兵が竹の棒で私の右足をたき、左によじれば左の足をたき、およそ道の真ん中を歩くことができるからであった。

小休止の際もそのまま道の真ん中に横になっておればよかったが、道端に背囊を枕に横になつたのが間違いであった。睡眠不足と高熱のためそのまま眠りこんでしまった。出發の合図に全然気がつかなかった。道の真ん中であればだれかが気づいたであろうに、目がさめたときにはすでに数時間を過ぎていると思われた。熱の下がりぐあいから、熱発のときはいつも朝の六時ごろに平熱に戻っていたので、朝の三時ごろではないかと思われた。

なんとか歩けそうなので、立ち上がって歩こうとしたが、行き先が右手か左手か歩く方

向がわからなかった。昨夜の熱発で全然記憶がなかったのだった。なんとか歩いてきた方向を思い出そうとしたが、思い出せなかった。方向を間違えれば敵のほうへ行くことになる。仕方がないので歩いてきた方向を思い出すまで動かないことにし、再び腰を下ろし、何か記憶に残っていないか懸命にたぐった。

大分時間が経過したころ、車の音らしいのが聞こえてきた。音はこちらのほうに近づいてくるようであった。用心のため林の中に身を隠し車の近づくのを待った。

一台の牛車で、現地人が一人乗っていた。戦線の近くでおかしいとは思ったが、道に出て牛車を止め、「ジャパンマスター？」と聞いてみた。牛車の上の現地人は、右手後方に手を伸ばし、何か言っていたが、牛車に乗っている自分の横を手でたたき、ここに乗れという仕草をした。どこへ連れて行かれるのか多少不安はあったが、乗ることにした。現地人は牛車を反転させ、幾分牛を急がせてくれたが、中隊に迫り着いたときにはすでに夜が明けて、みんな大休止していた。中隊長と指揮班長に、「遅くなりまして申し訳ありませんでした。眠っていて出発に気がつきませんでした」と詫びた。「そうか」のひと言が返ってきただけで、別にお叱りは受けなかった。

それから一週間ほど夜の強行軍が続いた。急進命令が出ているようであった。ミクテー

ラを敵の機甲部隊に占領されたので、その奪回に向かっているようであった。

行軍の何日目のことだったか、小さな村落で、通りがかりの家の中に冬瓜を見つけた。大きな冬瓜であった。持って行って小休止のとき皆で食べたら喜ぶだろうと思い、肩に担いだ。なだらかな細い山道では上り坂になると、どうしても遅れがちになった。とうとう大砲隊のところまで遅れると、小隊長から「その重いのをここに置いていけ。落伍するぞ」と冷やかされたが、意地になって小休止まで担ぎ通し、皆から大いに喜ばれたことがあった。

強行軍の末、部隊はラシオ街道に出た。ここからはトラックに乗せられ、破壊された橋梁の近くで降ろされ、ミクテラまではまた強行軍であった。

トラックを降りたあたりからひどく暑くなった。それまでは北部の山店地帯だったので暑さはそれほどでなく、夜など涼気を感じるほどであったが、急に平野部に下り、ひときわ暑く感じられた。途中で盛夏服に杵替えなければとてもじゃなかった。

四



Imperial War Museums より転載

ミクテラの攻撃地点（六哩道標付近）に到達したのは昭和二十年三月十日の朝であった。具体的な攻撃命令は前日に出っていたようで、行軍途中で硝子びんを拾っていくよう指示があった。ガソリンを入れて火炎びんをつくるためであった。戦車を相手の作戦であるのは明白であった。ガソリンは行軍途中で補給するということであつたが、攻撃地点に着くまで補給はなかつた。拾つた硝子びんは何の役にも立たなかつた。

戦車攻撃用に各戦闘小隊は一個ずつ吸着地雷を持っていたのではないかと思う。ほかに黄色火薬を若干持っていたのではないかと思うが定かでない。

三月十日の攻撃開始については後日、文献で知つたが、攻撃命令は第五十六連隊の第一大隊に下された。

連射砲と連隊砲が協力することになつてゐた。攻撃開始日については軍命令によるものとはいへ、これでは壕を掘る余裕もない。師団参謀、第一大隊長とも一日の猶豫を上申したが、軍参謀は聞き容れなかつた。

攻撃開始地点の選定もよくなかつた。なだらかな起伏

のある平坦地で、地面が岩のように固く、円匙で壕を掘ることは不可能であった。その上、遮蔽物があまりなく、身を隠す場所がなかった。逆に敵の戦車にとっては地面が固い上、見通しもよいため行動はまったく自由で、このようなことが日本軍の犠牲を多くしたと思われる。

攻撃開始地点に着いたのはちょうど明け方であった。戦車の大きなキャタピラの跡が見えた。相当大きな戦車であることがその大きさから容易に想像できた。

大隊長が中隊に来て、「三中隊から向こうの稜線に斥候を一人出し、稜線の向こうにいる戦車が行動を起こしたら、赤一星を上げて直ちに帰れ」と命令した。指揮班はこの命令を全員聞いていた。中隊長は「だれか」と言い、指揮班員の顔を見回した。みんな連日の強行軍でかなり疲労していたので、顔色で疲労の度合いを測っていたのではないかと思われた。

私は役目柄、信号弾を全部持っていたので、私が行くのが穏当ではないかと思い、きついなどとは思ったが、「松尾が行きます」と名乗った。「よし、行つてくれ」と中隊長に言われ、指揮班の散開する地点に背囊を置いてから、信号弾を持って稜線に急いだ。

並の駆け足で稜線の頂上に着くと、向こう側に数十両の大型戦車が見えた。しばらくす

ると戦車は右に左に動き始め、隊列でも組んでいるのか、準備運動でもやっているように見えた。直ぐに赤一星を上げて引き返した。帰りは何か追つかけられるようで、早駈けで帰ってみると、そのときには適当な遮蔽物にはだれかが入っていて、私が入れそうな遮蔽物は残っていないかった。

無理に入ろうとすると、「もう入れんよ」と断わられた。仕方なく皆から少し離れた、何も無いところに背囊を置き、付近の草を集めて背囊を偽装し、その陰に隠れることにした。左側三々四メートルのところには大きな灌木があり、Y兵長がその陰にいた。右側三々四メートルのところにはI上等兵がいた。

間もなく敵機が頭上に飛来し、銃撃してきた。繰り返して、入れ替わり立ち替わり激しい銃撃だったが、地面が固くて円匙がささらず、壕が全然出来ていなかった。ただ地面に伏せて、弾が当たらないことを祈る以外、方法はなかった。

長時間、銃撃を繰り返した敵機が飛び去ると、稜線から大きな戦車が出てきた。一台、二台、三台……次から次に姿を現わし、こちらに向かってきた。凄い轟音であった。しかし戦車は一定の距離まで近づくと、それ以上は近づかなかった。後ろに随伴する兵士がときどき見えた。

ぶのと同時に、二人は空中に吹っ飛ぶように倒れた。後ろがやや小高くなっていたので、下がれば却って戦車のいい目標になったのであった。

頭から泥をかぶった。今のは近かったなと思い、左隣のY兵長のほうを見た。顔を伏せている様子がおかしかった。変だなと思ひ匍匐して近づき、「おい、山城」と言ったら、顔をあげてこちらを向いたが、既に顔色は無かった。

「どうした！ しっかりせよ」と叫ぶと、「テニヤーを取ってくれ。背囊に入っている」と言う。「テニヤーなら俺が持っている。ちよつと待てよ。持ってくる」と、私の背囊まで匍匐して取りに行き、Y兵長の手に持たせた。

テニヤーは、椰子から作った砂糖で、直径二〜三センチぐらいに丸めたものである。Y兵長はひと口、ふた口嘗めた。「旨いか」ときくと、軽く頷いたので、それ以上何も聞かずに私は自分の位置に戻った。

直後に至近弾による泥をまたかぶった。気になったので、「山城ツ」と呼びながら近づくと、既に死んでいた。

銃を杖に…

一

さっきの至近弾でやられたのかどうかは分からなかった。かなり以前にやられていたような気もする。様子が変だったので、「おい、山城」と最初に声をかけた時、銃声にかき消されてよく聞こえなかったが、「肩を……」と聞こえたようであった。覗いてみて出血しているようではなかったが、既に顔色は無かった。長くはないような感じであった。

夜になればなんとか状況の変化も期待できるであろうが、太陽はまだ真上にあつた。この状況の中では、とても夜まで持ちこたえられないと思われた。猛暑が余計に気分を憂鬱にした。朝から何も食べていなかったが、あまり空腹は感じなかった。中隊長は相変わらず木の後ろに立ったまま指揮をとっていた。

左のほうを重機関銃の銃身を担ぎ、走ってくる兵が見えた。上半身は裸であった。連続射撃で銃身が焼け、熱いので上衣を脱いで、銃身の下に挟んでいるように思えた。現役の

時は機関銃中隊であったので、分解搬送の要領を思い出していた。

敵戦車は銃砲弾を撃ち尽すと交替しているようであった。銃砲撃は間断なく続いていた。正午を過ぎて一〜二時間ぐらいではなかったろうか右足に鉄の棒で強く叩かれたような激痛が走った。『やられた！』と思った。確認しようと思ってもその方法がなかった。

上半身を起こすわけにはいかなかった。仕方なく右隣のⅠ上等兵のそばまで行き、「足をやられたようだ、見てくれないか」と言つて、右足をⅠ上等兵の顔の横に出した。Ⅰ上等兵は、「足をやられていますよ。三角巾を巻きます」と応急処置してくれた。

礼を言つて自分の所定の位置に戻り、中隊長に足を負傷したことを報告したら、「動くなよ、動くとまたやられるぞ」と案じてくれたが、実際のところ、足をやられているので動こうにも動けなかった。

動けない以上、覚悟を決めざるを得なかった。足を動かしてみたら激痛が走った。傷は盲貫ではないかと思つた。銃撃砲は相変わらず間断なく続いていた。友軍の砲も機関銃もすでに破壊されているのではないかと思われたが、戦車からの相手の銃撃砲は一向に衰える気配がなかった。かえつて至近弾が多くなつた。

頭から泥をかぶり、特に今のは近かつたぞと思ひ、暫くおいてⅠ上等兵のほうを見たら、

顔中血だらけで、頭が半分吹っ飛んでいるかのように思われた。近づいて声をかけたが応答はなく、既に死んでいた。

時間の経過が長く感じられた。頭を伏せている時、「三小隊、残存兵力一名」と呼ぶ声が聞こえた。頭を上げたが誰も見えなかった。中隊長は「最後の一兵まで死守だ！」と大きな声で叫んでいた。

それから間もなくであった。中隊長が後ろを向いて、「田尻はおらんか、田尻兵長はおらんか」と叫んだ。私の左後ろのほうから田尻兵長が駆けつけると、「この書類を持って連隊本部へ下がれ」と凶嚢を渡した。私も兵器の書類を持っていたので、「田尻兵長これも頼む」と、書類の入った凶嚢を渡した。中隊長が最後の肚を固めたのが察せられた。

時間の経過がよく分からなかったが、中隊長が無言で右に走り出すのを見た。が、それから先がわからなかった。やられたのではないかと不安になったが、どうしようもなかった。日が暮れるのを待つほかはなかった。

待望の夕暮れ近くになったが、敵の銃撃はやむどころか一段と激しくなった。私は何もかも諦めて、引っくりかえって目を閉じていた。戦車の轟音が近づいてくるようであった。蹂躪を始めたようで、極度の緊張感が身体中をかけぬけた。戦車は走りながらも撃つてい

るようであった。轟音は次第に近づき、いよいよ身動きできなくなった。目を閉じ戦車の轟音だけを聞いていた。音はいよいよ大きくなったが、不思議とそれからだんだん遠ざかり、引きあげる気配であった。

夕闇が迫り、ようやく夜を迎えようとした。戦車は稜線の向こうに引きあげ、戦場は何ごともなかったかのように静かになった。よくぞ助かったなあと思いつほどの余裕はまだなかった。上半身を起こして、だれか生きている者はいないか周囲を見回すが、まったく人影の動きは見えなかった。

ややあつて田尻兵長がきた。「無事であったか、足をやられたのか、悪いところをやられたな」と言い、「中隊長は?」と訊かれた。「右のほうへ走ったが、あとはよくわからん」と答えている時、横溝兵長も来て、同じようなことを言った。

三人で今日一日のことを語りながら遺体の処理について話し合った。田尻兵長に、「連隊本部に下がったんではなかったのか」とたづねると、「下がりがけたが、とても下がれる状況ではなかったので、途中の空井戸の中に隠れていた」と言っていた。

遺体の処理があるので、二人は動けない私に、それまで待つようにいった。喉がカラカラだった。水を少し持ってきてほしいと言うと、『我慢しろ、出血がひどくなるぞ』と、二人とも立ち上がった。しかし間もなくして横溝兵長が水の少し入った水筒を持ってきてくれた。

いくら待っても担架はきてくれなかった。再び横溝兵長が来てくれた。「この様子じゃ担架がくるかどうかからん。よかったら俺が肩を貸すから一緒に下がらんか。もう仮の包帯所ぐらいいは出来ているはずだ」と言ってくれたので、「すまんが頼む」と、左手で彼の肩につかまり、右手の銃を杖にして下がることにした。

銃を杖に立ち上がってみたが、立つのがやっとだった。歩けるかなと不安だったが、他に方法はなかった。包帯所が数百メートル下がった所に出来ていたが、たどり着くまで時間は十倍以上かかったように思えた。

横溝兵長に礼を言い、帰ってもらったあと治療を受けた。ほとんど戦死して、他に負傷

者はいなかった。傷口を消毒して包帯を巻いてもらった。やはり盲貫であった。傷口の程度を衛生兵に聞くと、あまり大きくはないと言っていた。担架がくるまで天幕の外に出て、銃を抱き、星を眺めながら横になった。前夜から一睡もしていなかったが、傷の痛みで容易に眠れなかった。

朝からの出来ごとを思い浮かべている時、大きな声がした。少し離れた所で、将校と兵らしき者が激しく口論していた。日常あるまじきことだが、昼間の興奮がまださめていなかのようであった。

衛生兵がきて、うまくとりなし、騒ぎがおさまったので、星を眺めながらうとうとしていたら、飯盒と水筒とを持ってきてくれた。朝から何も食べていないのがわかっており、飯を炊いてきてくれたのであった。腰をおろして、今日の戦闘のことなど話し、四、五分すると立ち上がり、「これでお別れじゃな、最後まで諦めんで生きろよ」と言い残し帰って行った。

当時は退却作戦中である。足をやられたら自分で逃げ切れないので、命は諦めたほうがよいといわれていたが、その衛生兵は、最後まで諦めないように言ってくれたと思われた。この彼の言葉は、いつまでも心に残り、諦めかけた時に思い出し、生きるのに大きな力であった。

横溝兵長が帰ってからしばらくして、連隊本部のA軍曹が横を通りかかり、「どこをやられたのか、足か」と言い、腰を下ろして声を小さくし、「ここは夜が明けたら戦車がかかるぞ」と耳うちしてくれた。担架がくるのを待っているというのと、「くるかどうかからんで、俺が肩を貸すから一緒に下がろう、俺は明日の朝までに戦闘指令所に着けばいいんだ。下がると師団の衛生隊が近くにある」と言ってくれた。

連隊本部の衛生軍曹が、担架がくるかどうかかわからないと言うのだから、見込みはないと思った。「いいですか、それではお願いします」と軍曹の好意にすぎることにした。立ち上がったものの、実際に歩いてみると遅々として進まず、ゆっくりとしか歩けなかった。軍曹は「これでは夜が明けるまでに着かないな」とつぶやきながら、何か方法を考えているようであった。その時、友軍の山砲陣地が見えた。軍曹は「松尾兵長、済まんが、あの山砲陣地でひと休みし、日が暮れたら一人で衛生隊まで行ってくれないか。このままじゃ夜が明けるまでに、戦闘指令所に着けそうにない」と申し訳なさそうに言った。「わかりました、そうします」と自分に言い聞かせ、軍曹とは山砲陣地で別れた。

山砲の将校に事情を話し、許可を得て、その日は山砲陣地で休むことにした。陣地は、大きな長い地隙の中にあつて、ちょうど陣地構築したかのように出来ていた。しかし、まっ

たく偽装していなかった。飛行機には危ないと思つたが、まだ陣地進入したばかりで、これから偽装するのだろうかぐらいに考え、山砲の戦闘に邪魔にならないよう、砲から少し離れたところで横になった。二日ほどほとんど眠つていなかったもので、横になるとすぐに眠つたようである。

夜が明けて、山砲が射撃を始めても、その射撃音を夢うつつのように聞いていた。正午を過ぎたころ、やっと目がさめた。太陽がギラギラ真上から照りつけていた。喉が乾いていたが水筒の水は無かった。頭の上のほうで人の走ってくるような物音がしたので、とつさに銃を手にして、その方向を見ると、日本兵が二人肩に何かを担いで、山砲陣地に飛び込んできた。肩に担いでいたのは無線機のようなものであつた。

二人が興奮して状況説明しているのが聞こえた。本部がやられた、というようなことを言つていた。どうやら説明の内容から軍の配属無線ではないかと思つた。本部とはどこのことだろうか、連隊本部のことだろうか、などと考えていたが、二人とは離れていたもので、わざわざ這つて行つてまで聞くことはしなかつた。

その日一日、山砲陣地は飛行機の銃撃もなく、戦車の襲撃もなかった。日が暮れてきたので衛生隊まで歩くことにした。喉がカラカラだったので、山砲の兵に水はないかとたづねた。「あいにく、ここも水がない。少し下がった所に湖がある。そこまで辛抱せんですか」という返事であった。水は諦めて、将校に戦闘指令所の位置を聞くと、星を指差し、「あの星を目印にして真つすぐ行けばよい」と教えられた。教えられたとおりに、銃を杖にして両手に持ちかえながら歩き始めたが、立っているだけで傷の痛みが激しくなるので長くは歩けなかった。十分か二十分に一回は腰を下ろし、足を高くあげて、いたわってやらねばならなかった。それでも夜は長いと思い、あまり焦る気持ちはなかったが、夜が更けるにつれてだんだん心細くなった。方向は間違っていないかと常に不安であった。月の明かりがほとんどなく、あたりは真の闇に近く、薄墨を流したように何も見えなかった。音が全然しないのも、かえって不気味であった。

方向を間違えないよう七、八時間ぐらい歩いた頃、左前方にかすかに明かりが見えた。

方向さえ間違っていないければ、日本軍のはずだと思い、一応は警戒しながらも少し近づいてみた。天幕が見え、その中の話し声がかすかに聞こえた。夜明けが近いので、もう起きているな、と思い、さらに近づくと、話し声は日本語であった。安心するとともに、足の負傷のせいか、こうまで用心深くなった自分がおかしかった。

天幕の入り口まで行き、少し開けて、衛生隊の場所を聞いたが分からなかった。水を飲ませてもらいたいと頼んだ。「水はここにはない。少し行ったところに湖があります」といわれ、天幕を離れた。さらに二十メートルぐらい歩き出したところで、後ろから呼びとめられた。

「歩兵さん、ですか。足を負傷しているようですね。その足では夜明けまでに湖には着けないでしょう。少しですが、この水を飲んで行きませんか」

差し出されたのは水筒でなく、飯盒の中蓋だったが、水を入れて持つてきてくれた。蘇つたような気持ちであった。

湖に着いたのは夜が明けて、大分時間が経ってからであった。思いきり水を飲み、水筒も満水にし、小休止をしている時、通りかかった兵に場所を聞いて、衛生隊には朝のうちに着いた。

衛生隊では衛生曹長が、私を道路端の草叢に座らせ、傷口を消毒してくれた。新しい包帯にとりかえながら、「この足でよく歩いてきたもんだ、担架はなかったのか」と呆れていた。そして、「今日は彼処で休んでいてくれ。夕方には迎えにくる。俺たちは向こうの林の中に待避する。もし戦車がきたら林まで来い」と、肩につかまらせながら、畠のような所へ連れて行ってくれた。

二メートルぐらいの細い木が数百本、行儀よく植えられており、何かを栽培しているものと思われた。曹長は私をその中に座らせてから、「いつ負傷したのか、いつから何も食べていないのか」と聞き出し、「いま、飯を持ってくるから」と、取りに行こうとした。

「食事は欲しくありません。それより水を下さい」と頼むと、「水は、出血がひどくなる。辛抱しとけ」と言われた。「それでは食事もしりません」とダダをこねると、「わかった、水も持つてくるから飯を食えよ。食べんと体力が落ちて、傷もなおらんぞ」と言い、大きな握り飯三個とバケツに半分ほど水を持ってきてくれた。

「飯は必ず食べろよ。水は少しづつ飲め」と言ってくれたが、食欲はなかった。水だけ飲んで横になると、そのまま眠ってしまった。夕方まで戦車は来なかったが、太陽がギラギラ照りつけ暑かったので、何回か目をさますたびに水を飲み、握り飯は曹長に見つから

ないように遠くに投げ捨てた。

夕方、曹長がきて、「飯は食ったか」と聞いた。「食べました」と言うと、「日が暮れたら野戦病院に送ってやる。トラックが迎えにくるまで待機しておれ」と言ってくれた。夜になってトラックに乗せられ、第二野戦病院に送られたが、そこには一日いただけで、次の夜にはまたトラックで、第一野戦病院に後送された。

土地の名は覚えていないが第一野戦病院はお寺のような所にあつて、私は大きな木の下に寝かせられた。何の木か分からなかったが、朝のうちは木陰をつくってくれるので助かった。午後になると木陰が移動するので、そのつど衛生兵がどこからか出てきて、木陰になるように移してくれた。

四

ここで足に入ったままの砲弾の破片をやっと摘り出して貰った。やはり戦車砲弾の破片であった。砲弾の破片は、軍靴の底を貫通し、足の裏から入って骨に刺さっていたものと

思われた。足の甲を切開して摘り出した。一度だけで終わらず、その後数回にわたり骨の破片が出て、そのたびに足が腫れあがり、完治したのは一年四カ月後であった。

切開に麻酔は使わなかったが、手術そのものはそれほど痛くはなかった。しかし腫れはだんだんひどくなり、術後立つてみたが、痛みは前と変わらなかつた。ただ、これでよくなる、と期待が持てるようになり、気分だけはよくなった。

野戦病院でも食欲はなかつた。幾らか熱があつたのかもしれない。朝の飯がそのままになつてゐるのを見て、衛生兵が、「これなら食べられるでしょう。食べないと体力がつきませんよ」と、次にはお粥を持ってきてくれた。お粥でも食欲がなく、そのままにしておいたら、こんどは干パンを油で揚げ、砂糖をまぶして持つてきてくれた。その好意が涙の出るほど嬉しかった。無理にでも食べなければ濟まないと、ひと粒ずつ食べることにした。

水は食事のつど水筒に補給してくれたので不自由はしなくなつた。こんどは煙草が吸いなくなつた。もう何日も吸つていなくなつた。甘えついでに思いきつて衛生兵に頼んだ。「私は煙草をやらないので持つていませんが、夜まで待つていてもらえばさがしてきます」と言い、夜になるとシャンセレ五本を持つてきてくれた。早速、一本吸つたところ、目が回るようで、なんともいい気分であつた。

第一野戦病院に入つて二日目であつたか、衛生下士官が、「松尾兵長は一大隊だよな、大隊長から大隊の者に渡してくれと頼まれている」と、恩賜の煙草を一本渡してくれた。大隊長は戦死したものと聞いていたが、足を負傷して、ここに入院しているとわかり、戦死でなくてよかつたと思つた。

一番困つたのが大小便であつた。足が立たないので、そのつど難儀をした。野戦病院に入つてからは衛生兵がよく介助してくれたが、申し訳ない思ひであつた。戦況が逼迫し、ここも危なくなつたとかで再び後送されることになつた。この野戦病院では至れり尽くせりの看護を受け、好意が身にしみてありがたく、なんとも感謝の言葉もない思ひであつたが、急に決まつたのか、夜あわただしい出発支度でトラックに乗せられ、十分なお礼が言えなかつたのが心残りであつた。

野戦病院のあり方については、そのあと後方のいろいろな病院を転々としているうち、戦友との雑談の中で、それは師団長の方針だとか、あるいはそれは郷土愛によると聞いたが、どちらも本当ではないかと思つた。野戦病院のあり方は、戦線の士気にも影響するであろうし、郷土愛についてはマニラの看護婦の事例でも明らかで、その後もたびたび経験した。さて、患者護送のため私たちを乗せたトラックは、朝方とある部落で大休止した。

夜になるの待つためであった。私は、大きなお釈迦様の寝像のある建物の中で休むことにした。ある兵士と一緒にであった。

この兵士については部隊名も階級も覚えていないが、肩から胸にかけて大きく包帯を巻いていたのを記憶している。二人で横になりながら雑談していた時、何を思い出したのか急に、「あんた、金は持っているか」と訊いてきた。

「いいや、金は持っていない」と答えると、彼は、「俺の背囊を見てくれんな。金が入っている。全部持って行ってくれ」という。おかしいなと思い、「金は持つとかにやいかん」というと、「俺はもう長くはないもんな」と言った。私は、弱気にならず元気を出して頑張るように励ましたが、彼は大分衰えており、言葉が弱々しかった。そのうちに私は眠ってしまった。

二日目にクメロードの一〇五兵站病院に着いた。広島編成の病院だと聞いた。チーク林の中に病棟があつて、私たち患者は凹みになった所に、十人ほど一列に寝かせられた。食事はお粥のようなものが出ていた。軍医は午前中に一回治療してくれていた。しかし、衛生兵の患者に対する態度は、先の野戦病院とは大違いであった。「なんだか知らんが、こんどきた患者は飯だけはよう食らうでよ」と聞こえよがしに言うのを聞いて、ひどい病院

だなど思った。

二日目か三日目の夜であった。衛生兵が、「独歩患者は本部に集合せよ」と大声でふれて回った。昼間銃声がしていたので、病院も危なくなると判断し、独歩患者だけ護送するのだろうかと思っていた。だけれが、「動けん者はどうするのか」とどなるように訊くと、「トラックで送ってやる」との返事だったので、皆安心したようであった。私の寝ていた所の一群は皆担送患者のようで、だれも出ていかないようであった。

五

その翌日は朝から大分銃声が近くなっていた。敵の機関銃の音が良く聞こえていた。だれ言うとなく、「近くなったな」と言っていた。その日は所定の時間になっても朝食が出なかった。

最初は、「朝食が遅いなあ」と一人が言うと、もう一人が「病院は何をしているんだ」と不満を言いながらも、まさか出ないとはだれも思っていなかった。そのうち銃声が増す

ます激しくなってきたのに、軍医の治療もない。「おかしいぞ、だれか本部に行ってみらんか」ということになって、いくらか歩ける者が見に行ったら、本部にも炊事場にもだれもいなかった。

一瞬、どうするかと私は考えたが、すぐに「万事窮す」と思った。太陽はやがて正午を告げようとしていた。このまま此処におれば、殺されるか、手榴弾で自決するしか道がないのは明白であった。しかし立つこともままならぬ足で、逃げのびるのは不可能と思われた。銃声もすぐ近くまで迫っていた。

そう思う一方で、どうしても助かりたかった。生きて帰れないことは覚悟していても、こんな所で死にたくはなかった。

だれかが「逃げようや」と言いだした。

その声を聞くと気が焦った。銃を杖にして立ったが、立つてられなかった。膝の下を紐でくくって立ってみると、幾らか痛みが和らぐような気がした。

その時また誰かが「とにかく逃げよう。動けんようになったら、そのとき考えればよからうが」と言った。何人かが支度を始めているようであった。

私も逃げられるだけ逃げて、逃げきれない時には、そのとき考えよう、と決心して支度

を始めた。歩くためには出来るだけ軽装でなければならなかった。

小銃、弾薬、背嚢は捨て、護身用と自決用に手榴弾一発、それに飯盒と水筒、雑嚢及び寢具として天幕一枚を持って逃げることにした。

お互いに声を出し合い誘ったが、脱出したのは五人であった。I准尉にU曹長、M軍曹、N上等兵と私であった。五人の中では私が最も歩くのが遅く、すぐに歩けなくなつて腰を下ろさなければならなかったが、皆は私に合わせて歩いてくれた。少しでも迷惑をかけまいと懸命に歩いたが、極めてゆつくりしか歩けず、五分間ぐらいしか歩けなかった。

話し合つて銃声の反対方向に逃げているはずなのに、銃声は一向に遠くなる気配がなかった。なんとなく自分の責任のように感じられたが、皆の叱咤激励で、少しずつ歩度が上がり、歩く時間も長くなった。

そのうちにU軍曹がいなくなつた。U軍曹は足に全然異常がなく、いつも先頭を歩いてしたが、耳が聞こえず、休憩と叫ぶ声にも聞こえないまま、たびたび私たちから離れていた。

四人になつた私たちは、少しでも銃声から遠くならうとして懸命に歩いた。夜になつて銃声はやんでも歩き続けた。夜が明け染める朝方になつて、小さな川に出会つた。川幅三メートルくらいのものであったが、川を渡つた瞬間、傷を水に濡らしたためか痛くて全然

歩けなくなった。

ちようど河岸に小屋があつたので、その中でひと休みすることにした。牛小屋のようで藁が敷いてあつた。四人は横になるとそのまま眠ってしまった。

目がさめたのは夕方であつた。眠りからさめて幾分元気になると、昨日から何にも食べていなかったので、急に腹が減ってきた。「飯を炊こう」ということになつて、炊飯の準備をし、煙が見えないように暮色が迫るのを待ち、外に出て炊飯していた。

その時、体格の良い現地人が二人近づいてきて、「お前らは何だ？」と言つた。日本兵に向かつて、お前らとは何ごとかと思ひ、「何おっ」と、手榴弾を握つて身構えた……。

脱出

一

二人連れは、「俺たちは『ひかる』の者だ」と言った。現地人ではなく、日本兵であった。さらに、「どうしたのか」と訊ねられたので、前日からのいきさつを簡単に説明すると、押し黙ったような声ながら語気を強めて、「クメから逃げてきたって？ 逃げる方向が達うではないか。ここは敵地だぞ」というのであった。私たちのほうがびっくりした。「はッ」と言っただけで、言葉が続かなかった。

『ひかる』というのはビルマ方面軍の特務機関と聞いていた。現地人の姿でスパイ活動中なんだろうと合点がいったが、それにしても敵地だとは驚いた。

敵地に逃げるのはおかしい、戦闘を嫌がって戦線離脱を企図しているのでないかと疑われたようだ。「負傷しているのなら傷を見せろ」と言った。私たちが傷を見せると納得がいったらしく、「よし、分かった。飯を食ったらすぐここを発て。友軍はあの方向だ」と前方チー

ク林の半ば右手のほうを指差した。「ただし道路はすべて封鎖されている。このチーク林の中をいくんだ。日が暮れて出発しても、夜が明けるまでには着く」と教えてくれた。

早く立ち去るように言われたが、とても歩けそうになかった。「足が痛いので、できれば四、五日休んでから行きます」と言った。「それなら日が暮れたら迎えにきてやる。飯を食」ったら、ここで待機しておれ」と言って二人は立ち去った。食事のあと、どうして方向を間違ったのか、えらいことになった、など話していると、先ほどの特務機関兵二人が牛車できた。「これに乗るんだ、日本軍の所に連れて行く」というので、私たちは牛車に乗った。ところがこれで友軍の所まで楽に行けると思ったのは大間違いであった。

牛車は道のないチーク林の中を急ぐので、車輪の右か左かが始終、両脇の木からのびた根に乗り上げ、そのつど車台が大きく傾くたびに振り落とされそうになった。それ以上に傷の痛みをこらえるのに必死で、脂汗が出るくらいであった。他の者も顔をしかめて辛抱していた。

夜中の何時ごろであったか、ようやく牛車は幅五、六メートルぐらいの道路に出て停まった。「この近くに日本軍がいる。病院は自分たちで探せ。俺たちは任務があるのですぐ帰る」と特務機関兵から言われ、礼を言って牛車を降りた。

まだ夜中のようで、辺りには人の気配はなかった。皆疲れているので、とにかく寝る場所を探そうということになった、適当な所がすぐに見つかった。大きな木の下が、ならしたように平らになっていて、四く五人は十分寝られそうであった。夜露も凌げそうであった。私たちは横たわるとすぐに眠ってしまった。

朝方、足を蹴り飛ばされたように感じて目を覚ました。夜が明けかけていた。目の前に下士官が立っていた。「ここは寝る場所でない。自動車を置くために作つてあるんだ。出て行つてくれ」と言われた。

せっかく気持ちよく眠っていたのに起こされて腹立たしかった。「それくらいで起こすことはないじゃないか。車はよそにもつていけ。文句があつたら手榴弾を投げるぞ」と向き合つた。

険悪な空気に、将校が出てきて、「お前達はどこの部隊か」と訊いた。「菊」とだけ答えた。「そうだろう。えらい元気がいい。こんな無茶を言うのは菊じゃないかと思つたが……」と言ひ、「しかし、どうして菊の兵隊がこんな所にいるんだ」と再度訊いた。

兵站病院からのいきさつを説明すると、「よし、分かつた。ここに寝ていてよい。起こして悪かつたな。自動車はよそにもつていく」と理解してくれた。

物分かりのいい将校は、さらに「菊といえば、福岡（県）のもんはいないか」と問いかけてきた。「私は大牟田です」「私は福岡です」「私は小倉です」と三人が名乗ると、「そうか、俺は狼（部隊）の輜重（連隊）におるんだが、飯塚なんだ。奇遇だな」と懐しそうにうちあけ、「お前たち、病院をさがしているんだろう。この車は今晚日が暮れてからバナナ畑までもつて行って焼くんだ。確かその近くに病院が開設していたはずだ。良かったらそれまでここに待機して、乗っていかないか。迎えにきてやる」と言ってくれた。

一一

厚意に甘えて待機していると、日が暮れてから朝方の車が来て、私たちは乗せてもらってバナナ畑の手前まで行った。そこはシャン高原の上り口で、その先は道がなかった。そのため自動車を処理するのだろうかと思った。

私たちが車から降りる時、先ほど将校が、荷台の上の兵隊に「菊の歩兵さんにやっつけ」と指示し、「持っていかんな」とドンゴロスに入った米一袋を投げ下ろしてくれた。九州

弁が懐しく、うれしかった。厚く礼を言つて立ち去ろうとすると、将校は、「シャン高原は登るだけで達者な者でも二日かかる。途中、水が一個所しかないのです、水のある所で必ず大休止せよ」と、こと細かく教えてくれた。自動車が行ったあと、米を皆で分けて持つことにしたが、足の悪い者ばかり四人では、全部は持てなかつた。

とりあえず麓でひと休みすることにし、朝方目を覚ましてみると、周囲は一面草原で、立ち木もまばらで見通しがきき、シャン高原のごつごつした岩膚が視界を遮つていた。朝食を済ませ、皆でこの坂をどうやって登ればよいか話し合つた。達者な者でも二日かかるのであれば、私たちは四〜五日以上はかかると思わなければならなかつた。問題は水が一個所しかないことであつた。

いくら考えても良い知恵も浮かばない。とりあえず四〜五日休養して力を蓄え、水のあつる所まで一気に登ることにして、あとは雑談していた。そのとき横を通りかかつた兵隊が、私たちを見て、「お前たちは一〇五（兵站病院）の患者ではないか。なんでこんな所にいるのか。みんなの所へ行け。松葉杖を作つてやる」と言つた。一〇五兵站病院の衛生兵のようであつた。

松葉杖が要るのはN上等兵と私であつたが、N上等兵は松葉杖を持つていた。作つてや

ると言ったのは、私の顔を見て言ったのかなと思つた。その時I准尉が、「お前は一〇五の衛生兵か、ちよつと来い」と語氣鋭く、軍刀を杖にして立ち上がる姿勢を見せた。

途端にその衛生兵は、私たちのことを思い出したのか、左手に一目散に逃げて行つた。いずれ何処かの病院で治療を受けなければならなかつたが、一〇五兵站病院の世話になる気持ちはなかつた。恨みごとのひと言も言えなかつたのだけが残念であつた。皆も同じような気持ちであつたと思うが、満足に足が立たない以上仕方のないことであつた。近くに一〇五が開設していると分かつたが、皆で話し合い、押しかけることまではしなかつた。

そのことがあつて二日後の朝、「今から野戦倉庫を開く。欲しいものがあれば取りに来い。場所は向こうの一本木の下」とのしらせがあつた。何でもいいから貰つてこようと思ひ、「俺が行つてくるから」と私は、天幕に長い紐をつけ、杖をつきながら出向いた。場所はすぐに判つた。塩、乾燥味噌、乾燥野菜など数品を天幕に載せ、係の下士官に、「これだけ貰つて行きます」と言うと、「受領書に書いてくれ」といわれた。入院していた病院に捨てられ、ここまで逃げてきたので受領書がないと言い、同時に菊の歩兵であることを告げたら、「困つたな」とは言つたが、持つて行つて良いとは言つてくれなかつた。

そのとき同じように糧秣を取りに来ていた下士官が、「受領書なら俺が何枚でも書いて



やるよ」と言い、さらに「菊の歩兵さん、なんでも好きなかだけ持っていかなですか」と口を添えてくれた。礼を言つて、紐を肩に担ぎ、天幕を引きずりながら帰途についた。

大きな木の横を通りかかると、「すみません」というような声がした。声のほうを見ると、肩から胸にかけて包帯を巻いた、上半身裸の兵隊が木に寄りかかつて座っていた。「どうしたんだ」と訊くと、「すみませんが、少し分けてくれませんか」と消えるような声で言った。

「分けてやってもいいが、お前は足はどうもないんだらう、倉庫はすぐそこに開いているんだ。貰いに行け。もっと元気を出せ。初年兵か」と言つてしまつたあとで、ちよつと言ひ過ぎであつたと思ひ、気の毒になつた。

「いいよ、これ全部やる

よ。俺がもう一回貰ってくる」と、野戦倉庫に引き返し、もう一回糧秣を貰うと、木の下
の兵隊の所に戻り、遠慮したが最初の半分ほど渡し、残りを二回目分と合わせて持ち帰った。

三二

二度目に木の下に寄った時、腰を下ろして、その兵隊と官姓名を名乗り雑談をしたので
はないかと思われるが、はっきり記憶していない。しかし、あとで考えると思い当たるよ
うなことがある、またその兵隊が初年兵ではなく、軍曹であったのを憶えている。翌日の
夕方、大分休んだので、ぼつぼつ登ろうか、いつかはどうせ登らなければならぬんだか
らと、登る決心をし、日が暮れかけてから行動に移った。三、四時間ぐらい登った時、N
上等兵が、「ちよつとちよつと。静かに……。松尾兵長、あんたの名前を呼んでいるようだ」
と告げた。皆立ち止まって耳を澄ますと、「五十六の三中隊の松尾兵長お！」と呼んでい
るようであった。おかしいなと思った。五十六の三中隊は自分の中隊で、松尾というのは
他にもいたが、兵長は自分一人のはずだった。こんな所に知り合いはいないのに……と思っ

ていると、N上等兵が、「あんた、返事せんか、五十六の三中隊じゃろうが」と促した。

再び、「五十六の三中隊の松尾兵長」と呼ぶ声が聞こえたので、「おい」と半信半疑のまま返事をした。「どこかあ」と聞こえたので、「ここだあ」と答えた。こんどは、「そこを動くなよお」と言つたようなので、「わかったあ」と声を張りあげた。そのまま動かずに待っていると、暫くしてまた、「五十六の三中隊長の松尾兵長」と声がしたので、「おい」と返事した。「どこかあ」「ここだあ」と応答を繰り返すうち、次第に声が近くなつて、軍曹を長とする兵六、七人が現われた。

軍曹は、「われわれは五十六の一大隊の者である。メイミヨウの病院に入院していたが、危くなつたので自己退院して本隊に追及している途中、敵が入つたので迂回しているところだと言ひ、さらに「あんたがここに登つてくるらしいと聞いたので待つていた」と話した。「それはどんな人でしたか」と聞こうとするより先に、軍曹が、「装具を全部外し、渡してくれ。われわれが持つて行く。杖だけ持つて、われわれの先頭を登つてくれ。もし傷が痛むときはいつでも休んでくれ。われわれも休む。遠慮はいらない」と言葉を続けた。私たちは持ち物全部を彼らに持つてもらひ、身軽になつて先頭を歩くことになつた。

持ち物がなくなると、登るのがうんと楽になり、歩度が早くなつた。健康な人がついて

くれていると思えば気分的にも楽だった。傷の痛いのはできるだけ辛抱して、極力長く歩くように努めた。

入院下番の皆さんのお陰で、思ったより早く水のある場所まで着き、大休止することになった。食事の支度も総て皆さんでやってくれ、私たちは十分に休養をとることができた。食事のあとは夜まで眠ることにした。そのとき引率の軍曹に、私のことを聞いたという兵隊について聞いてみたが、心当たりがなく、いつまでも心の中がふつきれなかった。多分、糧秣を分けた軍曹だと思う。名前も聞かされたが、いまは記憶にない。

夕方になって前日と同じような格好で、杖だけをついて登ることにした。岩だらけの道で歩きにくかったが、軽装なので思ったよりはかどった。だれかが、この道は象だけしか登れないそうだと言っていたが、その通りだと思った。登るのに何日かかったかは覚えていないが、入院下番の皆さんのお陰で、あまり苦勞することもなく、思ったより楽に登ることができた。

登りきった所は平坦な道路につながっていた。途中変わったこともなく、何泊か重ねて夜中にカローに着いた。カローには兵站病院があるとかで、引率の軍曹に薦められるままに入院することにした。

病院はすぐに見つかった。引率の軍曹が病院の衛生兵と話をつけてくれた。「病院の了解をとったので、ここに入院して下さい。われわれは本隊への追及を急ぐので、これでお別れします」と丁寧に言われた私たちは、「ありがとうございます」と厚く礼を言い、別れた。

病院は立派な洋館建てであった。「手続きは明日やって貰います。今晚はとりあえず休んで下さい」と衛生兵が部屋に案内してくれた。部屋は天井が高く、寝台が何脚か置かれていた。

案内の衛生兵が引きあげても、すぐには寝なかった。久しぶりの室内だった。たまに個人寝台で寝ることはあったが、どうして今までこんな建物が残っているのだろうか、もっぱら話題が集中した。飛行機は来ないのであるのか、いや、明日にでも危ないのではないだろうか等、話しているうちに、「こんな所はかえって危ない。明日、朝食を食ったら抜け出そう」と話し合って決めた。

四

決めたら最後、だれかが、「朝食は食わんでも米を炊けばいいじゃないか。夜が明けたらここを出よう」と言いだし、夜が明けるのを待つて病院を出た。

病院の横の広い野原を過ぎた所に長い凹地があり、真ん中をごく小さな川が流れていた。川岸には芹がたくさん生えていた。私たちはここで夜まで待避することにして、芹粥を作つて食べた。シャン高原には芹が多く、芹粥は米の節約になるので、その後もよく作つて食べた。

食べたあとは今までの習慣で、横になつて眠るしかなかった。昨夜もよく眠れたので昼過ぎには目が覚めた。I軍曹が、「松尾兵長、あそこで治療しているようだよ。治療してもらつてきたら……」と言うので、その方向を見ると、野原の中央付近で軍医が治療にあつてゐるのが見えた。

だれかが、「なんであんな所で治療しているのかな」と言った。「おかしいぞ、今日やられたんではないか」、「それにしても爆音は聞こえなかつたぞ」、「いや、寝ていたので判ら

なかったのではないかと、どうしても話は悪いほうへいきがちだったが、「とにかく治療してこよう」と私は野原の中央へ行くことにした。

治療をしてもらうにあたって、看護婦に、「暫く治療をしていないので、蛆がわいたのか、傷が痛むので治療してくれませんか」と、少しオーバーに言った。「蛆がわいたのは蠅を追わないからです。手に異常ないのですから、蠅を追えば蛆がわくはずはありません。衛生材料がない時に、そんな人の治療はできません」と断わられた。

「何をツ」と思ったが、足はままならないし、軍医や衛生兵もいた。大きな声を出すことも、手をあげることもできない。じつと辛抱するしかなかった。

その時、衛生曹長が近づいてきて、小さな声で耳うちしてくれた。「日が暮れたら向この小屋にきなさい。治療してあげます」衛生兵の手は、左の小屋の方向を指差していた。一たん元の所に戻り、日が暮れてから小屋に行ったら、衛生曹長が待っていてくれて、ピセット等をアルコール・ランプで焙つてから、傷口を奇麗に消毒し、ガーゼを当て、新しい包帯を巻いてくれた。古い包帯は、今後自分で交換する時のために貰い受けた。

カローには一週間ほど居たのではないかと思うが、その間の出来ごとについてはあまり記憶がない。病院には夜帰って、朝出て行っていたのではないかと思う。それも毎日では

なく、自分たちで勝手気ままに過ごしていたように思う。一度、米がなくなつたので、どこかの倉庫に盗みに行ったのだけ覚えていて。二人で行つたが、足が悪いので、見つからばおしまいだと思つと、いい気持ちはしなかつた。が、背に腹は換えられなかつた。

他には昼間待避をしている時に、朝鮮半島出身の狼部隊の兵隊といろんな話をしたり、城島で酒造りをしていたという兵隊とも話し合つたことがある。このころには仲間は一三人になつていた。M軍曹とN上等兵と私とで、I准尉はどこで別れたのかまつたく記憶にない。

一週間ぐらいのち、後送してやるといわれ、トラックに乗つたらタウンギに着いた。タウンギには一二一兵站病院があるということであつたが、私たちは病院に入院しなかつた。道路からあまり離れていない所に無人の家があつたので、その中に入ることにした。五人はゆっくり寝られる広さであつた。土間もあり、食事の支度には便利であつた。

先のことを考えると、米はできるだけ食わずに、温存しておく必要があつた。そのころはいくらか歩けるようになっていたので、三人で手分けして毎日食料を捜し回つた。

小屋から三十メートルほど離れた所に小さな川が流れていた。その川で米を洗つたり、洗濯をしていたが、川岸には芹がたくさん生えていた。ときどき芹粥も作つたが、芹だけで済ませることもあつた。

五

小屋の中には唐きびを粉にしたものがたくさんあった。水で練って平らに延ばし、焼くと結構代用食になったが、毎日続けると下痢をし、続けては食べられなかった。畑にはトマトや人蓼、小豆ができていた。小豆以外は生育が悪く、雑草のようであった。トマトの実は塩汁にして食べ、人蓼は実も葉も食べることができた。

銃声を聞くことはまったくなかった。時折り遠くのほうで飛行機の爆音を聞く程度で、戦闘のことは忘れ、毎日のんびりと食料捜しに精出していた。

そんなとき、三人とも小屋の中にいたのだが、銃声が一発だけした。ごく近くであった。一瞬、皆緊張した。しかし、あとが続かなかったので、「おかしいぞ」と顔を見合わせた。

N上等兵が、「牛を殺したんではないか」と言い出した。それなら分け前を貰いに行こうではないかということになり、N上等兵と私が、杖とビルマダー（大きなナイフ）を持って、銃声の方向に急いだ。

勘は当たっていた。道路の端で牛が殺されていた。だが私らが到着するまで大分時間がかかったので、肉はほとんど取り去ったあとであった。遅かったのをくやみながらも、肉の小片がまばらに付いた肋骨を全部折って持ち帰った。

持ち帰った肋骨は、大きな缶に入れ、水をたっぷり注いで長い時間交替で煮込んだら、少しばかりのラードが出来た。ラードは野菜汁に少しづつ入れると、味が格別よくなるので、その後大変重宝することになった。

ある朝、三人で雑談している時、だれかが「今日は天長節だな」と感慨深げに言った。そういえばその日は四月二十九日であった。「そうか、俺も負傷して五十日にもなるんだ」と独り言のようにつぶやくと、「それにしても一〇五は、とんでもない病院だったな」と話は一〇五兵站病院のことに及んだ。「しかし殺されなかっただけ、ましではなかったか。普通、あんな時は担送患者は殺して下がるというぜ」

「いや、殺す暇がなかったんだよ」

「それにしても軍医や衛生兵の風上にも置けんやつらだ」といったぐあいだった。

それから話は、「でも松尾兵長は、よくここまで歩けるようになったものだ」と私の負

傷のことに戻り、N上等兵が、「松尾兵長と競走してみようか」と言いだした。

松葉杖と一本杖が競走することになって、二十メートルほど走ったが、全然相手にされなかった。松葉杖でも使い慣れると早いもんだなと思った。私はまだ走るところまではいっていなかった。

それから何日後か、私が飯盒で炊飯している時、前の方を両松葉の兵隊が通った。なにげなく見ていると、松葉杖と一緒に右手に持った飯盆の蓋から、歩きたびに水がこぼれていた。

あれでは水がなくなるぞと思い、「おい、ちょっと待てよ」とそばまで行き、そのように言つて、どのくらい水がなくなっているのか飯盒の蓋を取ると、まだ炊飯に支障のない程度は残っていた。

「まだいいな、俺と一緒に持つて行つてやるよ」と並んで話しながら歩いたが、その部隊のなまりが筑後の言葉のようであったので、「郷里は九州ではないのか」と訊くと、「はい、部隊は烈ですが、出身は福岡県の柳川です」と答えた。

だれか他に水を汲んでやる連れはいないのかと思ひ、どこの部隊の者と一緒なのか尋ねたら、祭（師団）ということであった。

「それなら俺たちの所にこんか。俺たちは三人だが、三人とも福岡県なんだ。来れば水汲みなんかせんでもよい。水は俺たちで汲むので、あんたはじつと座つて、飯炊きをやつてくれればいい」と誘うと、その兵隊は、「そうします」と喜んだ。

その日から私たちと行動をとにもすることになった。兵隊は、烈部隊のK上等兵であった。烈はビルマで新設された部隊で、菊からも一個連隊編入されていたので、九州の兵隊がいた。

多分、K上等兵はインパールで負傷したのだろうと思つた。祭の兵隊と一緒にいたのは、烈も祭もインパール作戦に加つたので、そのためであろうと思つた。

タウンギには二十日間ぐらい居たように思う。トラックに乗せられ、ロイコを径由してケマピューに送られた。ケマピューは、ビルマ第一の大河サルウィン河の渡河点である。対岸まで数百メートルあつた。工兵隊が夜だけ船で渡してくれるので、順番がくるまで待機しているように言われた。

私たちは、ここに何日いることになるか判らないと思つたが、遠く離れると渡河の機会を逃すおそれがあり、渡河点近くの適当な凹地に陣取ることにした。

夜が明けてみると、あちらこちらの木の下に、患者が横たわっているのが見えた。病院

が大分集結しているのだと思い、状況が幾分のみこめるようになった。

戦線はどうせ負け戦で、北から南へと動いているのかもしれないが、病院や野戦倉庫の非戦闘部隊は、東に向けてタイ国に逃げようとしているのだろうと思った。

そうなると大変だろうと思った。泰緬国境の山岳地帯のジャングルを、どうやって越えるつもりなのか。民間人もちらほら見えたし、中には女性も居た。

木の下で横たわっている担送患者と思われる人たちは、どうして運ぶのだろうかなど考えた。

米と包帯が欲しいなど思った。米は少しばかりはあったが、これから何十日間かかるかわからないと思えば、米は持てるだけ持つて行く必要があった。

包帯もガーゼも全然持っていなかった。盗むことを考えて、昼間少し歩いてみたが、米や医療用品を入れてあると思われる倉庫は見当たらなかった。諦めるより仕方がなかった。

飛行機は時折り飛んできたが、銃撃はしてこなかった。

一人ぼっち

一

ケマピユで渡河の順番を待つて、何日か過ぎたころ、中年の民間人がやってきて、「兵隊さん、牛を殺してくれませんかと言った。訳を聞こうと思ったが、余計なことを聞くのはやめて、「殺してやろう、何か殺すものはあるか」ときくと、『拳銃があります』と言う。「殺し賃は?」というと、「片足でどうですか」と答えた。「足は、前か後ろか」、「どちらでもいいです」、「それでは後ろ足を貰うことにしよう」、「内臓は?」「要りません」「では内臓も貰うよ」という約束で、牛のいる場所に案内してもらい、拳銃を受けとると、牛を奥のほうに引いて行つた。牛は疑うこともなく素直についてきた。

殺したあとで解体することを考え、適当な場所まで誘導して、拳銃をスボンの後ろポケットに入れ、右手に草を持って左手の手綱を引き寄せた。牛が五十センチぐらいまで近づいた時、右手を放してけんじゅうに持ちかえ、下から静かに持ち上げて、眉間を狙つて撃つた。

銃声と同時に横転したので、すぐに首を斬って血を流した。

殺した牛を解体している時、どこからか将校がきて、「ここは俺たちが使っている場所だ。そんなものはよそに持って行け」と言った。簡単に運ぶことは出来ないし、困ったなと思つたが、ふと見ると将校の階級は中尉であつた。咄嗟に、「松尾太尉殿に聞いてきます」と答えると、「判つた、とにかく早く片付けろ」と、それ以上は言わずに立ち去つたので、大急ぎで解体し、後ろ足一本と、心臓、肝臓を貰い、N上等兵と二人で担いで歸つた。

歸つて皆と話し合い、当分は米代わりに食べようということになつたが、それにしても半分以上は残ると思われた。また、毎日食べるにしても同じような料理では飽きるに決まつている。食べられそうにないと思われる分については、腐らないうちに焼いて乾燥することにし、ときには肉をミンチにして竹に巻き、竹輪のようにして焼いて食べたこともある。私が肉を焼いていると、臭いを嗅ぎ出し「少し分けてくれないか」という者がいたが、気が向かなければ適当に断っていた。看護婦がきて、「兵隊さん、お肉項戴」と言つたときもそうだった。「やつてもいいが、その代わり包帯とガーゼを持ってきてく

れないか。困っているんだ」と言うのと、「包帯もガーゼもありません」とそつげなかつた。看護婦については、カロリーの病院の一件以来いい感情が持てなかつた。包帯とガーゼを

くれさえすれば、欲しいだけ肉を分けてやっていいと思っていたが、向こうから断わったので諦めた。

翌日、同じように肉を焼いている時、頭の上で女の声がした。少し低くなった所で焼いていたので、私の頭の高さぐらいの所に女がこちら向きに腰を掛けていた。女は、「兵隊さんたち郷里はどこね」と聞いているようであった。女は二人連れのようにであった。どうせ肉の無心であろうと思ひ、相手にせず肉を焼いていた。

M軍曹が女の相手をした。「俺たちは九州の福岡県だ」と言っているのが聞こえた。「そうじゃないかと思ひました。あつちで兵隊さんたちの話を聞いていたんです。私たちは甘木です」と言っていた。

そのまましばらく雑談しているようであったが、そのうちに「肉を頂戴」という話になったようだった。M軍曹が私に頼めと言っていた。

女たちは、私に「兵隊さん、お肉頂戴」と言ったが、私は、女たちが私の頭の上のほうで腰掛けて話しているのが面白くなかった。肉が欲しければ降りてきて手伝うのが本当ではないかと思っていたので、ついカツとなり、「お前たちは、どこからものを言いよるか」と声を荒げた。

女たちは「おお恐」と驚いていたが、M軍曹が「あの人が牛を殺してきたんで、あの人によく頼め」というと、「そうじゃろうねえ、牛でも殺しそうな顔してる」と、冗談半分にしても、ひと言多かった。余計に腹が立ち、「お前たちに肉はやらん」とはねつけた。あとで大人気なかつたと思つたが、あの調子では私のいない時に、M軍曹が適当に分けてやるであらうと思ひ、そのままにした。

一一

肉にも食べ飽きて、久しぶりに米を炊こうということになり、私は米を洗いに飯盒を持つて河へ下りて行つた。乾季の終わりごろで水位が低く、水のある所までは河岸から数十メートル下りなければならなかつた。米を洗い、水を張つたあと、上り坂を急ぐこともないので、杖を片手に何か食べられる草でも見つかからないものかと、のんびりと坂を上つていた。やがて夕暮れにならうかという時間であつた。

坂の中ほどまで上つた時、左の叢の向こうで人の話し声が聞こえた。おかしいなと思ひ、

少し近づいてみると、女の声であった。わざと音を立てながら叢に近づくと、軍医と看護婦が河を向いて腰を掛けていた。二人の頭の上には大きな岩がかぶさり、ちょうど横穴のようになっていた。

看護婦は、膝に包帯やガーゼのようなものを持っていた。「看護婦さん、その包帯とガーゼを少しくれませんか」と言った。「私ではありませんから」と一旦は断われそうであったが、軍医が何か言ったらしく、包帯とガーゼをしぶしぶ二、三個分けてくれた。これでは助かったと思つた。

何日かたつて、やっと渡河の順番が回つてきたようであつた。独りで歩ける者は病院が連れて行くとのことであつた。歩けなければ象でタイ国まで送るということであつたが、三人だけで何とか歩こうと決めた。K上等兵だけは両松葉で、どうしても無理だと本人がいうので別れ、三人で船に乗ることにした。

船に乗る前に行き先を告げられ、一人ずつ飯盒一杯の米と、少々の塩を受領した。タイ国のチェンマイ北方の淀（部隊）の野戦病院が行き先であつた。

渡河して船を下りたあとも三人だけの旅になった。何日間かは道があつたので、夜歩いて昼眠るようになつていた。何日目かに特務機関らしい者から「ここからタイ国領土になる

ので、夜は寝て、昼歩いてよい」と言われ、その後は昼歩くことにした。

足が遅い私たちを時折り追い越していくグループがあった。その中に慰安婦と思われる二人連れの女がいた。彼女たちはどうしたわけか私たちの前になり後になりして歩いた。私たちが道端で休んでいる時に、彼女たちが通りかかったので、冷やかに声を掛けると、笑って通り過ぎていった。

そのうちに上り坂になり、道がだんだん狭くなり、ついには道がなくなってしまった。それから先は抜け回路を開いたものらしく、道を開いたと思われる痕跡を頼りに歩いた。所どころに標識がつけてあった。足場の悪い山道を毎日連続の上り坂であった。昼でも薄暗く、足元を確かめながら歩くことがあった。いよいよ国境のジャングル地帯に入ったと思った。

道がなくなった辺りで、後になり先になりして歩いて二人連れの女が、一緒に連れて行ってほしいと言いだした。反対する理由はなかった。「俺たちは三人とも足が悪いので、歩くのが遅いが、それでもよければついて来い」と言い、それから暫くの間は男女五人で歩くことになった。

一人の女はA子と言っていた。もう一人の名前は覚えていない。二人とも私より若いとみた。初めのうちはお互い遠慮もあつてか、いさかもなく平穩に歩き続けた。休憩

した時は、私と松葉杖のN上等兵は疲れがひどく、しゃべる元気がなく、身体を休めるのに精一杯だった。一番元気なM軍曹が何かと話し相手になっていた。夜は私たちの近くで寝ていた。

何日目かの夕方、私とN上等兵が飯盒で飯を炊いていると、A子という女が、「兵隊さん、これも一緒に炊いて」と飯盒を持ってきた。「なにいつ、女の癖に飯ぐらい自分で炊け。帝国軍人を何と思つちよるか」と怒鳴りあげると、女は怒って帰った。

このことがあって以後、A子はM軍曹とはよく話をするが、私とN上等兵とは口をきかなくなり、いつの間にか二人は夜も一緒に寝るようになった。

S子がM軍曹と寝る時、もう一人の女は、一人では恐ろしいので、私とN上等兵の横に寝させてほしいと言ってきた。からかい半分に、「でけんぞ、お前はA子と一緒に寝ればいいではないか」と言うと、「A子はM軍曹と寝ている」と言った。

「構わん、お前も横で寝ればいいんだ」とさらにからかうと、「お願いだからここで寝させて」と泣き声になった。「仕方がない。寝てもいいから、うんと離れて寝ろ」と距離を置いて寝たが、朝起きるとすぐ横に寝ていた。

道のない山道を歩くので足場が悪く、いつも下を向いて足元を用心をして歩かなければ

ならなかった。上を向いて歩く余裕はなかった。ジャングルの中は陰湿で、余計に気分を陰鬱にした。所どころ矢印を書いた紙切れが木の幹に貼られていた。道を間違っていないことだけは確認できた。

三二

初めのうちは少し遅くまで歩くと病院に追及することが出来たが、別に手当てはしてやらなかった。彼らにしても歩くだけで精一杯であったろうし、こちらもそのつもりはなかった。包帯交換は自分でやった。負傷した右足は軍靴が履けないので、地下足袋の上を切り開いて履いており、包帯はいつも濡れていた。ケマピューでガーゼと包帯を貰っていたので助かった。ぼつぼつ雨季に入るころではないかと思っていたが、ほとんど雨に遇わなかった。マラリアの熱発の最後が負傷する前のものであったのが不安だったが、熱発したのは山を下りてからであった。

不安は食糧であった。米さえあれば何とかかなると思っていたが、ケマピューで渡河する

前に貰った飯盒一杯の米に、持っていたわずかな米を加えても、この先何十日掛かるか分らないと思うと心もとなかった。途中に現地人の部落があるらしいと聞いていたが、それまで何日かかるか分らなかった。つとめて食い延ばしを図り、副食にはたんぼやあかぎの葉、芹のほかきのこをとるようにした。ケマピユーで作った乾燥肉が大変役立つた。

十日ぐらい歩いたころ、小さな部落に着いた。米もなくなりかけていたし、まずはホツとした。早速、米を手に入れようとしたが、米に換えられるような物は何一つ持っていなかった。言葉が通じないので、身振り手振りで現地人と接した。マリアアの葉キニーネを欲しがっていることが分った。キニーネは何粒か持っていたので交渉して、持てる程度の米を手に入れることができた。部落には一日か二日大休止して、元氣を回復して出発した。依然として歩行困難な山道の上り下りであった。ほとんど一日中、河の中を歩いたこともあった。女たちは原色の、けばけばしい布地をたくさん持っており、部落で高い値段で取り引きしたようであった。食糧は旨いものを仕入れ、煙草も吸っていた。私が無心をすると断わられたので、M軍曹から貰って吸ったことがあった。

そのうちにM軍曹が熱発した。私たちは、「お前のせいでM軍曹で熱発したんだから、お前が看病してやれ」とA子に看病を任せ、ひと休みすることにした。A子はよく看病を

していた。幸いM軍曹の熱発は一日でおさまったので、再び歩くことになったが、山を下りた時には元の三人だけに戻っていた。彼女たちといつ、どのようにして別れたのかは記憶にない。

山の中でその後も一度、部落に出会ったが、米を仕入れるキニーネは、もう持ち合わせでいなかった。クレオソートを持っていたので、マラリアの薬だと偽って米と交換したことがあった。悪いことは承知の上でも背に腹はかえられなかった。なぜクレオソートを持っていたのか、理由は思いつかない。

泰緬国境の密林の山岳地帯を越えるのに二〇日間ぐらいかかったように思う。山を下りた所に小さな部落があった。部落民に聞くと、チェンマイまで一〇〇キロとか二〇〇キロとか言った。まだまだ先は長かったが、これから先は山はなく、道が続いていると聞いて、途端に明るい希望が持てるようになった。

しかし米はなくなっていた。米に換えられるような物は何一つなかった。仕方がないので着ている上衣を脱いで米と換えてもらったが、それが悪かった。この地方は夜がまだかなり冷え込む。その夜は部落の外れの草原に天幕を張って寝たが、寒かったのは間違いない、翌日、早速熱発した。

マラリアの熱であるのは分つた。しかし、キニーネはすでに米と交換して持つておらず、処置の方法はなかつた。以前にも作戦中に熱発しながら行軍した経験がある。他の二人に迷惑をかけられなかつたので、そのまま歩くことにしたが、熱が高くなるにつれて、足元がふらつきはじめた。

四

折りよく牛車に乗ったタイ人が車を止め、「マスター、マラリアか？」と声を掛けてくれた。歩きぶりを後ろから見ておかしいと思つたようであつた。不意に声を掛けられたので、半ば警戒しながら相手を見た。牛車には、他に一人と、自転車が載つていた。

「うん」と手短かに答えると、牛車をたたきながらタイ語であろうが、何かしゃべつた。ここに乗り、と言っているようであつた。多少、不安はあつたが、休みたい気持ちが強かつた。N上等兵も、「乗せてもらつたら」というので、決心をして牛車の世話になることにした。

とうとう一人になつてしまつた。ミクテラ以来三か月、苦難をともに泰緬国境を越え

たM軍曹、N上等兵とここで別れた。いつか行った先の病院で会うこともあろうと思っていたが、病院には着いていると思われるのに、いつまでも会えずじまいであった。

牛車に乗せられ、横になってからは熱のため眠り込んでしまい、起こされて、降りるよりに促された時は、すっかり夜になっていた。よくは判らなかつたが大きな邸宅の庭の入り口の感じがした。牛車に乗せてくれたタイ人は、このマスターのようであった。家の中から使用人らしい者が出てきて牛車を受け取ると、マスターは私を大きな木の下に案内し、そこに座るようにという仕種をして奥に入った。

横になりたかつたが、言われるままに木にもたれて座った。熱は最高に上がっていた。少しばかり喉が乾いた。熱が下がり始めたのではないかと思つたが、とにかくきつかつた。木の下で夜露も防げると思うと横になりたかつたが、辛抱をして暫く様子を見ようと思つた。

すぐに家族の者か使用人か三人ほどバケツを二つ持ってきた。一つにはお粥が半分ほどと、もう一つには水が八分目ほど入っていた。そして、私に食べるのを促す仕種をしたが、食欲がなかつたので、首を振つてそのことを伝えた。水だけは少し飲んだ。

それにしても不思議でならなかつた。お粥は熱発しているので作つてくれたのだろうか、どうしてこんなにくさん作つてくれたのか。また、着いて間もないのに、すぐ持つてき

てくれたのが不思議であつた。ふらふらで歩いているのを呼び止められ、牛車に乗せてもらう時、牛車に乗っている者が、載せてあつた自転車を下ろし、マスターと何か話をして先に行ったのを思い出しナゾが解けた。その使用人らしき人が、熱発した日本兵三人を牛車に乗せてくると連絡しておいてくれたのに違いなかつた。

やがてマスターがやってきて、また私にお粥を食べるように仕種ですすめた。私が首を振ると、マラリアの薬だといって、白い錠剤を一粒手のひらにのせてくれ、よく効くと、大げさな身振り手振りで説明した。

そんなに良く効く薬とは何であろうか、キニーネとは色も大きさも違うようだと思い、明かりのそばでよく見ると、片仮名の日本語でアスピリンと書いてあつた。なんだ、アスピリンかと思つたが、好意がとても嬉しかった。「ありがとう」と言いかけて、「サンクユー」と礼を言い直して、アスピリンを飲んだ。

サンクユーと言つたものだからマスターが、「ジャパンマスター、英語が話せるのか」と聞いてきた。何気なく「少しぐらいなら」と返事をしたために、あとでえらい恥をかくことになった。マスターが、それでは今後は英語で話をしようという意味のことを言い出し、使用人に何か言いつけたのだった。

五

マスターが帰って行くと、指示を受けた使用人が私を母屋から独立した小さな家に案内し、そこで寝るようにと毛布を持ってきた。家は、これまでにもよく見掛けた、竹やチークの葉を組み合わせて作った、一般の民家のような造りであった。使用人の家ではないかと思った。水も持ってきてくれて、至れり尽くせりであった。熱発はしているし、まったく夢のような気持ちで、その夜はゆつくり休むことができた。

翌朝は平熱に戻っていたし、久しぶりに家の中で眠ることができ、目が覚めたときは、とても良い気分であった。バケツに水が汲んであったので、簡単に顔を洗い外に出ると、少し離れた所に、木造ではあるが洋館ふうの白い大きな家があった。

家の規模からして、マスターはこの地方の知名士であろうと思った。家の前は庭であるうと思われ、広場の向こうにいろいろの樹木が植えられていた。左端の手前のパイヤの木は数本実をつけていた。

昨日、発熱で何も食べておらず空腹で、特に果物が食べたかった。少し若いかなと思つたが、ちぎつて小屋の中で割つた。やはり、若くて食べられそうになかつたので、塩汁の実にでもするかと思つていた。

その時、使用人らしい若い子どものような女の子が入ってきて、しきりに何か言つたがよく分らなかつた。多分、熱のぐあいを聞いたのだろうと見当をつけ、元気になつたような仕種を見ると、分つたようであつたが、次に私が二つに割つた若いパイヤを指差すと、笑いながら何か言つて出て行つた。

私は、悪いところを見つけれられたなと思ひ、まだ熟れていないパイヤをとつてきたことが恥ずかしくもあつた。もし、とがめられるようなことにでもなれば、出て行くまでと思つたが、出来ればもう暫く休養させてもらうのに越したことはなかつた。この日は熱が出ないはずだつたが、私の熱発は三日熱で、一日置きに二、三回出るのが癖であつた。

ややあつて、朝食の支度をしようかなと思つている時、先ほどの若い女の子が、米と副食少々と、熟れたパイヤを一つ持つてきてくれた。ありがたかつた。米は先日、上衣と交換したのでほとんど残っていたが、まだこの先のことを考えると、残しておかなければならなかつた。副食は何であつたか覚えていないが早速、朝食の支度に取りかかつた。

朝食を終えて、身体を休めるつもりで横になると、開けた窓から流れ込んでくる涼しい風が気持ちよかった。マスターは敵性の人ではなさそうだし、親切にしてくれるので、出来るだけゆっくりして、少しでも体力を回復したいと考えた。

その時、こんどは男の使用人がやってきて、マスターが呼んでいると言ってきた。案内されて母屋に行くと、応接間のような部屋があった。部屋の壁には、学校で使うような、大きな地図が掛かかっていた。かなり大きな部屋であった。

マスターは英語で話しかけてきた。私が少しぐらいだったら英語が分かると言ったので、話せると思ったようであった。私は少ししか話せないと身ぶりをまじえて説明しながら、最初からちゃんとそう言うべきであったと思った。

それからは、ゆっくりした語調で話しかけてくれたし、身振りを交えて話してくれたので、話の内容は大体わかるようになった。よく聞いてみると、戦争の状況についての説明であった。ガダルカナル島やサイパン島等、アメリカ軍の進出経路を細い棒で示しながら説明し、フィリピンもアメリカ軍の手に略ち、沖縄でも戦闘が行われていると教えてくれた。暗に日本は負けるとほのめかした。

ついこの間まで自分も参加した戦闘のことを思うと、とても勝ち味がないとは思ってい

たので、マスターの説明にもさほど驚かなかった。しかし一年ほど前入院していたマニラの病院のことを思い、また沖繩までもが戦場になっていると思うと、信じられない気持ちもあった。そういう気持ちが表情に出たのか、私の顔を見て、マスターは笑いながら本当のことであると繰り返した。

言葉が思うように通じないので、説明には長い時間がかかったが、その後は私がいろいろなことを訊ねられた。マスターが敵のスパイとは思わなかったが、言葉が通じないので返答に窮することが多かった。私のほうから頼まなかったが、話し終えると彼のほうから、何日でも休養してよいと言ってくれた。

心配していた熱発は翌日もなかったが、なお五、六日間休養させてもらったと思う。その間にマスターと一度会ったが、戦争の話はしなかった。重ねてゆっくりしていけといわれ、親切なマスターだなと思ったが、別に不審に思わなかった。

一週間ぐらいではあったが大分元氣も回復したので、マスターや他の人たちに厚く礼を言ってお出発した。淀（部隊）の野戦病院までは一週間ほどの行程であった。平坦な道路が通じていて、大して骨を折ることはなく、のんびりとした一人旅であった。夜は民家の庭先の、木の下で寝ることが多かった。

病院は、チェンマイの北十一キロのロンキョウという、小さな部落の近くにあった。

(続く)

※ 続くとありますが、お預かりした冊子原稿はここで終わっています。未完なのが、それとも完結はしているが、残り部分が失われたものか、ずいぶん調べたのですが、ついに不明のまま発表することになりました。大変、申し訳ありません。

奥付

著者／松尾 剛

発行者／竹下 博

電子版発行／編集工房DEP

大阪府南河内郡河南町大宝三丁目一〇番一五号